

かつて天を穿(うが)つほどに栄えた鉄の街は、陰(いん)鬱(うつ)な空の下で朽ち果てた。

男がいるのは、元々オフィスビルだった建物の最上階。そのフロアの一角は、まるで巨大な獣に噛み取られたかのように消失しており、灰色の空に姿を晒していた。

破損した壁に身を隠し、男——ハルは双眼鏡で街を見渡す。街は戦時の傷跡をそのままに、本来の機能を停止していた。

そして、時間を止めた街にはおよそ似つかわしくない闖入(ちんにゆう)

者が、紅い瞳を巡らして闊(かつ)歩(ぽ)している。

都市部での白兵戦を目的とした自動(オート)人形(マトン)。円筒形の身体から伸びる四本の脚を用いて、奴らは飽きもせず、日夜街を駆けずり回っている。一度、殲(せん)滅(めつ)対象を発見すれば、自慢のガトリング弾が獲物を奴ら好みに調理することだろう。

自動人形の数は三。連隊を組んで行動する常(じょう)套(とう)手段だ。距離約二〇〇〇。風は僅かに埃(ほこり)を運んでくる程度の弱風。自動人形は、ハルの領域(テリトリー)の外にいる。この距離ならば干渉される心配もない。

ハルは双眼鏡を覗いたまま、視線を遠方に向ける。

霧に煙った街境の様子を捉えることは難しい。かつては人類の夢をのせて稼働した軌道エレベーターの影だけが、うすぼんやりと覗けるぐらい。

だが向こうにはあの自動人形が有象無象のように構えている。それだけではない。見る者を圧倒する巨(きよ)軀(く)を備えた装甲機兵が、自動人形を統率しながら何体も待ち構えている。

あの場所に行くには、絶え間なくやって来る自動人形は無論、より性質の悪い兵器の群れをやり過ごす必要がある。もっとも、そんなことが出来る者が残っていれば、だが。

ハルは腰につけた、弾薬の詰まったポーチを確認し、狙撃銃のグリップを握り直す。彼の経験上、会(かい)敵(てき)の心配はないが、不測の事態に遭遇しないと限らない。ともかく索敵を終えた以上、こんな見晴らしの良い場所からは一刻も早く離れるのが賢明だ。

目的地までは歩いて十数分。たったそれだけの時間、埃と打ち捨てられた木偶人形の残(ざん)骸(がい)に紛れるだけだ。

飽き飽きするほどに普段と変わらない往復(ルーティン)運動(ワーク)に勤しんで一日がまた終わる。彼女の最後の命令を遂げる為。彼女の過ちを正す為。ハルはたった一つの命令を拠り所にして、責任という詐欺めいた言葉の為に生きながらえていた。

あの木偶人形と同じになるのはいつだろうか。明日だろうか、明後日だろうか。それとも今日、若(も)しくはすでに昨日か。彼はこの頃、そんな思考を堂々巡りしていた。そんな徒勞(思考)に時間をかけるようになったのはいつからだったか。ハルはまた考える。今日、昨日、あるいは最初からその徒勞こそが彼の自己存在の証明か——当てのない思考に、視界がノイズで霞(かす)む。

埃の積もった静寂を、不意に無数の銃声が破った。先刻に自動人形を観測した位置よりもずっと近い場所からの音だ。

ハルは遮(しや)蔽(へい)物(ぶつ)に身を隠したまま、うつ伏せになり射撃体勢に移る。瓦(が)礫(れき)に二脚を立て、無機的な冷たさの銃床に頬をつけてから、彼は銃声の理由を考えた。もし益体のない自問自答に夢中になって敵に補足されたのだとすれば、それこそ悩む間もなく木偶人形の仲間入りを果たすだろう。

可変倍率付きの照準器(スコープ)を覗き、即座に状況を把握する。自動人形の数は変わらず三機、距離は近づいているものの、ハルのいる建物とは別の方角を目指している。大人しくしていれば、奴らが彼の守る領域を侵すことはない。

自動人形は路地を前に散開した。一人一人が通るのでようやくといった狭さだ。おそらくは逃げ道を奪っているのだろうが、一体誰の？

照準を動かし、自動人形の獲物を探す。そして、ハルは瞠目(どうもく)した。その先には、人の姿をした女が走っていた。

昔の軍隊が着ていた、迷彩柄の戦闘服に身を包んだ女は、華(きや)奢(しや)な身体に小型の榴弾銃(りゅうだんじゆう)を抱えてはいるが、正面からやり合うにはまず間違いなく力不足。その上、相手は三機だ。勝ち目はない。今は路地に逃げ込んでやり過ごしているが、蜂の巣になるのは時間の問題だ。

ハルは照準を絞り、女の容姿を見た。黒の短髪、こんな荒れ果てた街には似合わない色白の肌。キッと前を見据える強い眼差し。その姿は彼が待ち続けていた人間に、あまりにも似過ぎていた。そんな人間

が、もう生きているはずはないというのに。

彼は本能に従うが如き早さで自動人形に銃口を向けた。人間を守らなければならないという彼の意思が、素早く照準を調整した。今この場所で狙撃をすれば、ハルの位置は特定され、自動人形たちは彼を敵とみなして容赦なく襲ってくるだろう。

だが、そんなことは関係がなかった。眼前の女性(人間)を守らなければならない。例えその相手が、彼が生涯待ち続けた者でなかったとしても。

まだ出てきては駄目だ。痺(しび)れを切らして通りに出れば、自動人形は忽(たちま)ち彼女を穴だらけの無惨な姿に変えるだろう。隠れていてくれ。そう念じて、再度狙いを定める。

激烈な衝動が、ハルの指先を操った。本能が理性を支配するという感覚に似たものを、彼は感じ取っていた。

動きを止めた自動人形に向けて、ハルはトリガーを引いた。

彼女に落ち度があったとすれば、それは油断というよりも単なる経験不足だった。

未だどの勢力も介在しない地域の敵を無力化するのでは訳は違う。この街はすでに機械が管理し、封鎖した地区。敵の戦闘力は彼女ら人類同盟を遥かに凌(りよう)駕(が)していた。先遣隊として放たれた仲間とは連絡がつかない。通信妨害が街全域に広がっている為連絡も取れない。それでなくとも、街中を引き裂いた銃声はすでに彼女の周りではか聞こえない。おそらく仲間は全員、すでに無力化(・・・)されているだろう。

他人の心配をしている余裕は彼女になかった。今の彼女には足を止める暇もない。荒廃した建物を隠れ蓑(みの)に、彼女はひたすらに駆けずり回ることしか出来ない。三機の自動人形を正面から相手になんてしてみればいい。ものの数秒で穴だらけにされるだけだ。

人恋しさでも求めるように、携えた榴弾銃をぐっと引き寄せる。残弾も二発。これだけの弾で、それも一人で自動人形を仕留めるなど不可能に近いことは、足し算しか出来ない子供にもわかる。

これまで集団による戦術で数多の敵をジャンクにしてきたが、彼女にはもう味方がいない。

いつも皆を先導してくれたウィルはどうしてこんな時に。怠け者のヨハンでさえ、隣にいれば今はどれだけ心強いのか。

狭い路地を駆けずり回りながら、ノアは胸中で仲間たちに向けて毒吐いた。だが、言葉にしている気力なんてとうに使い果たしている。

背後に響くガトリング弾の絶え間ない銃声。幅にして人間二人分はある自動人形は、とりわけ狭い道を選べば追ってくることは出来ない。周りの建物を容赦なく破壊すれば、瓦礫の下敷きになるが、どういう訳か奴らは、建物やかつての設備を必要以上に破壊しようとはしない。

それでも逃げ道を塞がれれば、彼女が袋の鼠(ねずみ)にされることに疑う余地はない。

ひび割れたコンクリートを踏みしめ、ノアは銃声から逃げるように暗がり走向了。逃げるという目的を果たす以外に、彼女に出来る作業(タスク)はなかった。静寂な、一縷(いちる)の光明を信じて、彼女は暗がりから抜け出た。

そして同時に、理解した。例え逃げ出せたところで、どこに光明なんてものがあるだろうか。

抜け出たノアの前に、どこまでも冷徹で無機的な銃口を構えた自動人形が立ち塞がる。

敵を目前にして、彼女は立ち尽くすだけだった。銃を構える素振りすら見せず、彼女はただ笑って、死の時を受け入れた。

刹(せつ)那(な)、目の前の自動人形は、音速の矢に貫かれて空を裂くような悲鳴をあげた。

命中。ハルの放った徹甲榴弾は間違いなく自動人形を貫通した。

しかしハルがトリガーを引く間に、女は路地から出てきていた。悲痛な嘶(いなな)きをあげる機械の塊が爆散するのは時間の問題だ。

「走れ！」

トリガーを引いた後、ハルは立ち上がり怒号をあげた。奇跡的にその声が聞こえたのか、はたまた彼女が自分で危険を察知したのかはわからない。だが、爆発の間際に彼女は駆け出していた。

炎を巻き上げて散り散りになった機械の悲鳴が、爆風となって彼女を襲う。風圧に吹き飛ばされながらも、彼女はどうにか持ち直した。

一機破壊。後戻りは出来ない。

瞬く間に次の標的へと標準を向けたハルは、まるで自らが元々、銃の一部であったかのように自然な動きでボルトアクションを行う。

状況把握に一瞬だけ動きを止めた自動人形に向けて、再度トリガーを引いた。無力化(クリア)。

だが最後の獲物は、すでに単なる狩りの標的ではない。残った自動人形はこちらの位置を把握し、すぐさま射撃を開始した。敵勢だと判断したものには、誰であろうと容赦ない銃撃が襲う。

ハルは狙撃銃を捨てて身を翻(ひるがえ)し、どうにか銃弾の雨を躲(かわ)す。まだ八〇〇メートル以上はあろう距離、それも地上から四階の敵にガトリングの標準を定めてくる相手に、襲撃の利点を失ってしまったのは致命的だ。

せめて彼女だけでも、逃がすことが出来ないか。

ハルは思考し続けながら階段を駆け下りた。ホルスターには榴弾銃。弾は三発あるがチャンスは一度訪れるかどうか。それとただの手榴弾が二つ。確実に仕留めるのならば自爆覚悟でなければならないだろう。

一階の玄関口。建物の柱に身体を滑り込ませる。粉々に割れた窓ガラスの向こうに自動人形の姿は見当たらない。だが奴らに気配なんてものはない。正直に出て行ってハル自身が粉(こな)微(み)塵(じん)にされたのでは、命令を果たすことも出来ない。

ハルは腰の手榴弾を一つ手に取り、栓を抜かずに外へ投げた。息を潜めていれば、爆発物に反応して何らかの行動を起こすことだろう。

反応はない。最悪は自爆を覚悟して突貫することも視野に入れていたが、まだ追い付いて来ていないのか。ハルはそのまま静かに入口まで忍び寄る。すると視界に現れたのは、先程の女だった。

「用心なことね。もう大丈夫だから、出て来たら？」

言われるままに姿を現したハルに対して、女は目を丸くした。

「武器も構えずに出てくるとは思わなかった」

「人間に、特に女性に対しては、例えば家族であっても礼を尽くせというのが親の教えなので」

そう言った彼の親は女性だった訳だが。

彼女は先程までのことも忘れて、くすっと笑った。まるで、人形のようによくできた顔立ちだった。手で口元を隠し、目を細くして笑みを浮かべる表情には、荒廃した街には似つかわしくない品性を漂わせていた。

「よく一人であれを仕留められたものですね。残弾も僅かだったんでしょう。ええと……」

「ノアよ。礼を尽くしてもらっているところ悪いけれど、そんなにかしこまらないで。あまり慣れていないの」

「名前は——ハルだ。了解したよ、ノア。俺もこっちの方が慣れてる」

ノアはわざとらしく咳払いを一つする。

「私一人なら確かに無理だったでしょうけど、誰かが注意を引いてくれたから難しくはなかったわ。集団戦術は私たちの十八(おは)番(こ)だもの」

「私たちというと？」

「ええ。私たち人類同盟。といっても、この街にはもう私しかいないのだけれど」

人類同盟という存在を、ハルは情報として認識してはいたが、実際にその存在の確証を得ていた訳ではなかった。

「何にしても助かったわ、ありがとう。あの状況で命拾いしたのだから、私にもまだマキナの加護があったみたいね」

ノアは手を組み合わせ、彼女の崇拜する神に祈りを捧げた。

「マキナ？」

「まさか知らないの？ 協調ギアは持っているでしょう？」

彼女は腰のポーチから協調ギアと呼ぶものを取り出す。ハルの記憶にも一致するものがあった。頭に着けると、黒い鏡面が視界をゴーグルのように覆う。彼の認識違いでなければ、それは仮想現実を見せる装置だ。

かつての核戦争の直後、まだ地球上には多勢の人間がいた。生き残った人間は疲弊し、争う気力も立ち上がる勇気も失った。磨耗した人間が必要としたのは精神の安寧。虚ろな眼(がん)窩(か)に光を取り戻し、土に打ち付けられた足で立ち上がる為に、彼らは自らの手で神を作り出した。

協調ギアは、その模造の神を見せる装置だ。この機械が見せる、同じ光景を目にして同じものを信じることで、人々は団結しその眼に再度光を宿すことができた。

そんな人々にとって、この機械は守り神にも等しい。それを持っていないと訝(いぶか)しむのは、今の時世だからこそ妥当と言えるだろう。

「なくしてしまったんだ」半ば上の空になってハルが言う。

「これ以上ここで談笑している訳にはいかない。三機もの信号が一斉に消えたとなれば、奴らはすぐに追っ手を向かわせて来るだろう。一先ず君にも付いて来てもらう」

「その申し出には賛成だけれど、どこへ？」

ハルは視線を下に向けた。植物の生気の欠片もない地面だけが、そこには広がっていた。

ハルとノアは薄暗い階段を降りていた。ハルが案内したのは、瓦礫と煤(すす)に埋もれた、かつては小さなクリニックが営まれていた建物だった。瓦礫——のように偽装した壁や天井の残骸を退けて、慣れた様子で降りていくハルの後ろを、ノアは恐る恐る付いて進んだ。

「この施設の主だった人間は酔狂な趣味をしていてね。街がこんなことになる前には、希少価値のある物や、法に触れているような珍品までを集める収集癖があった」

「それを隠匿する為に、こんな施設まで作ったと」

「許可も得ず、規則にも反して。おかげで今でもそのままって訳だ」

しかし、あれだけの戦闘があれば、そう上手くもいかないだろう。これまでハルは、戦闘を避けられない状況に追い込まれても、この施設の一定範囲の内では事を荒立てなかった。辺境まで誘い込み、始末するのが彼の手法だった。

当時の建築基準を無視して作った階段はうねったように弧を描いていた。長い階段をようやく下り終えて、ハルが鉄扉に手をかける。

ノアは思わず目を隠した。その部屋が電気による灯りで照らされていたせいでもある。しかし、そのことを除いても、部屋の調度品はノアにとって、見慣れない色彩を放つものばかりだった。花柄が設えてある赤の絨(じゆう)毯(たん)や、臙(えん)脂(じ)色の机や椅子。机の上には華やかな造花が飾られ、地下だというのにベージュのカーテンが取り付けられている。そんな珍品の数々が、広々とした部屋の隅々に並んでいる。

記録でしか知らない、平和だった時代の生活様式が、彼女の前に広がっていた。

「以前はもっと色々ごたついていたんだが。絵画や紙媒体の小説、石器時代から出てきた骨(こつ)董(とう)品(ひん)みたいな天文器具なんか山ほどに。もっとも今じゃ、瓦礫の山さ」

ハルが隣の部屋の扉に手をかける。人がくぐるには大き過ぎるほどの扉に違和感を覚えながらも、ノアは室内に足を伸ばす。

たちこめる埃に、ノアは顔を顰(しか)める。灯りの点いた広間とは違い、その部屋は暗闇に覆われている。書棚が縫(もつ)れる様に倒れており、近くにあったガラスケースも無惨に破壊されていた。ハルの言ったように、書籍や絵画、ノアには用途のわからない錆(さび)付いた機械の数々が放り出されている。

「生活に必要な日用品や機材、後はいくらかの武器は、外の廢材なんかを拾ってきてどうにか元に戻せたが、この部屋を戻すのは手間や優先順位を考えてもいつになることか」

「銃火器もあったの？」

「言っただろ。携行が許されるものもあるが、法に触れるような代物もあるんだよ」

「電力も使えるのね」

「内臓バッテリーが残っていたこともあるが、あの軌道エレベーターが稼働してからは、この街の一部にも電力が供給されている」

「私たちが拠点にしている場所でも発電施設はあるけれど、こんなところでも供給できるのは不幸中の幸いね」

——それもマキナの加護か。ハルはそう口にしようとして、そのまま言葉を飲み込んだ。

広間に戻ったノアは、力が抜けた様に肩を落とし、平静を繕っていた表情を翳(かげ)らせた。

「君の言う組織——人類同盟ってのは、やっぱりあの軌道エレベーターが目的か」

「ええ勿論。あれがなければ、宇宙からあの機械たちがやって来ることだってない。この地球を機械から取り戻す為には最優先で必要なことよ」

軌道エレベーター——かつて核戦争によって一度は滅びかけた人類が復興を果たした象徴であり、今となっては、ノアの所属する同盟にとっては敵の旗印でもある。

「その為に周辺の街から攻め落とす手(て)筈(はず)だったけれど、予測が甘かったわ」

「まさか、その為にここへ一人で？」

ノアは柳眉を逆立ててハルを睨み、理不尽な感情のやり場を見つけられずに消沈した。

「そんなはずないでしょう。確かに私たちは偵察の為に少数でやって来た先遣隊だったけれど、それでも上手くやる自信はあった」

しかし、撒(ま)けど倒せど現れる自動人形によって、徐々に仲間を失った。ノアがこれまでやり過ぎてきた地域とは、敵の戦力に雲泥の差があったのだ。

「出来れば彼らの亡骸を供養してあげたいけど」

「君が外に出ようとすれば、俺は強引な手を使ってでも止めることになるだろう。今は警戒も強くなっている。出て行けば殺されるだけだ」

「わかってる。これまでも同じように見捨ててきたもの。仲間の死体がある場所に、爆弾を投げ入れたことだってあるわ。けれど、彼らの弔いの為にも、一刻も早く仲間の元に戻らないと」

沈んだ表情から、胸を張って気丈に振る舞うノアを見て、ハルは苦(く)悶(もん)の表情を浮かべた。

「すまない」

どうして謝られたのかわからず、ノアは両手を宙であたふたとさせた。

途端に、先程の部屋とは別の扉が開く。ノアはそこから現れた相手を見るとすぐさま、腰に携えた銃を構えた。

「どうしてこんなところにっ！」

目の前の自動人形に向けて、ノアは銃口を向けた。

「待ってくれ、こいつは違うんだ。それにこんなところで発砲すれば君も俺も終わりだ」

自動人形の前に立ち塞がったハルを前にしても、ノアは銃を下ろさなかった。この地下室で榴弾を撃てばどうなるかはノアにもわかっていたが、彼女の経験は否応なく自身に臨戦態勢を命じた。

「お帰りでしたか、ハル」

「ただいまロビン。出迎えは構わない。客人もいたからな」

ノアは吊り上った眼差しでハルを凄んだ。

「これはどういうことハル？ どうしてそんな機械がここにいるの。ああ、そういうこと？ あなたは人類の裏切り者で、私を助けたのも情報を引き出す為だったということ？ 言葉を解する自動人形なんて妙なもので置いて」

「話を聞いて欲しい。こいつは外にいる自動人形とは違う」

弁解をするハルを尻目に、ロビンは四本の足を小刻みに動かしてハルの前に躍り出た。

「危険分子を捕捉。この場で最優先の保護対象であるハルの安全を確保しつつ、危険分子を排除します」

「待て！ 止めろ、ロビン」

ロビンが近づいて来ると、ノアは飛び退いて距離を保ち、再度銃を構えた。

「敵、攻撃態勢。こちらも攻撃に移ります」

ノアは思わず引き金に当たった指に力を込める。しかしロビンは構わず、胴体に収納されていた腕を伸ばし、攻撃を開始した。

腕から放たれたモノが、ノアの腕に当たる。それは軽い音を立てて床に落ちる。

「これは何の冗談？」

すっかり威勢を潜めたノアが、床に落ちた本を拾い上げて尋ねた。

「これがロビンの精一杯の攻撃さ。説明するのが遅れてしまって申し訳ない。ロビン、お前も命令を無視するとはどういうことだ」

「申し訳ありません。ですがハルの安全を優先した結果です」

「お前には物を投げる程度の攻撃機能しか搭載していないんだ。安全を重視するなら、俺の壁になるべきだった。それに何より、人間を攻撃するのはお前の優先順位にも反することだ」

ロビンは沈黙した。本格的に修理が必要らしい、ハルは頭を抱えた。

ロビンが別室に戻った後、二人は椅子を突き合わせて座った。

「あの自動人形は？」

「あれは俺が造ったものだ。と言っても、見ての通り素体は外にいる自動人形と同じだ。大部分が破損していたものを回収して、廃材を集めて俺が造り直した。銃火器の類は全て取り除いて、プログラムも組み直したよ」

「そんな設備まであるのね」

「元々はロボットの研究の為に詔(あつら)えた施設だったからな。成果が認められて以来は、大きな研究所に移ったが」

「研究……それも法に触れた？」

「そんなところだ」

ノアは頬杖をついて、ぼうっと室内を見渡した。何もかもが静かな空間。銃声と悲痛な叫びばかりを耳にしてきた彼女にとっては、まるでお伽(とぎ)噺(ばなし)の世界に迷い込んできたようなものだ。

「ロビンのこともまだまだ聞きたいけれど、あなたに関しても不可解なことが多過ぎるわ」

「聞きたいことがあれば、なんなりと」

冗談めかしているともつかない口調のハルに、ノアは姿勢を正して一つ一つ尋ねる。

「色々聞きたいけれど、そうね。あなたはどのようにして私を助けてくれたの」

「人間を助けるのは俺の役割であり、使命だからだ」

「使命なんて、随分と気(き)障(ざ)な言い回しね」

ノアの軽口に反応はない。ハルは腕を組んで思考に集中していた。

「じゃああなたは、人間を機械から守る為に、この街で狙撃手の真似事を？」

「人間を守るのは当然のことだ。それに俺は、人間の敵となった機械たちを、破壊しなければならない」

「何か事情があるようね」

ノアが品定めするように目を眇(すが)めた。

「命令なんだ。俺の主人であった女性の」

「主人？」

不意にロビンが隣の部屋から戻ってきた。危険はないとわかっているけど、ノアはその姿に身を縮めて敵意を忍ばせた。

「どうしたロビン」

「先程のことについて、ノア様に謝罪とお詫びの品を」

そう言ってロビンは、円筒形の胴体をひょいと下げた。

ノアはどっと疲労したように息を零(こぼ)した。憎い敵に似た姿をしていても、こんな高い声で平和じみた台詞を喋る機械を前に、神経をすり減らしてどうするのだと、自分を嘲(あざけ)った。

「気遣いどうもロビン」

「ありがとうございます。これは私が興味を示している書物の一つです」

ロビンは細い腕を伸ばし、手錠のような形の手で掴んだ本を差し出した。

「ありがとう」渋面を愛想笑いで押し殺し、ノアはその本を受け取る。彼女は不思議そうにその本の装丁を眺め回していた。

「文字は読めるのか」

「ばかにしないで。それ位の知識はあるわ。でも紙の本なんて見るのは初めてだったもの」

確かに紙媒体の書籍は、今となっては化石も同然の代物だ。不思議がるのも無理はない。そう考えながら、ハルはじっと彼女の表情に目を凝らした。

「これ、何の本なの」

「何百年前のSF小説さ。さっきの部屋に埋もれていたものの一冊で、ロビンは興味深いとか何とか言ってよく読んでるよ」

「機械が本を読むの？」

「あいつには人工(A)知能(I)が搭載されている。幼年期のようなものだが、人間に近い自律思考も可能はずだ」

読み流していた本から目を離して、ノアが眉を顰める。

「でも外にいる自動人形には、そんなものは搭載されていないはずよ。第一、自律思考型の機械なんてそれこそ宇宙にいるような違法の——」

そこまで言って、ノアは不満げに頷(うなず)いた。先程ハル自身が言っていた通りだった。

人間の脳の限界を超えた自律思考型のロボットは、人類の英知の結晶であり、それ故に人間が律することが出来なくなった不良品でもある。

「そんなものを置いておけば、軌道エレベーターを占拠したロボットみたいに、いつ反旗を翻すかわからないんじゃないの」

「ロビンにそこまでの機能も知能もないさ。設備も当時のものと比べればおざなりなものだ。日常会話や知的好奇心でそれらしく見せているだけだ。人型機械(ヒューマノイド)のように人の見たくて油断を誘うこともないし、中身ももっと低能なものだ。あいつに出来るのはハウスキーパーが精々だろうな」

ノアの不安を、ハルは手を振って遮った。ノア自身も、言葉以上の心配をしている訳ではなかった。あの機械がそれほど高度なものであるなら、今こうして話している内に寝首をかかわれていることだろう。

「それに本来、機械が無差別に人間を襲うことなんてあるはずがないんだよ」

ノアは表情を曇らせた。この男は先程の戦場で何を見て来たのだと言いたげに。

「ロボット工学の大原則。知らないか」

「それこそばかにしないで。過去のロボット工学における掟でしょう。丁度ロビンに貰った小説にも同じようなことが書いてあったわ」

ノアは手に持った本の表紙をハルに見せつけた。

「ああ、その本か。ロビンって名前もその小説のロボットをなぞって名付けたんだが、今はいいか。まあ現実の原則も、昔の研究者や作家が提唱した原則を踏襲して出来上がったものだったようだ」

ノアは本を置いて、記憶にある原則を読み上げた。

「ロボットは人間に危害を加えてはならないし、人間の危険を看過してもいけない。そこに反しない限りロボットは人間の命令に服従しなければならない。更にその二つの場合以外では、ロボットは自己を守らなければならない」

実際には四、五……と幾つもの原則が続いていく。しかし、その三つの原則がロボットを語る上では最も重要なものだった。

「だから安全って。でもあなたを守る為とはいえ、ロビンはさっき私に牙を向けたじゃない」

「あれは俺も予想外だった。ロビンが、ロボットが俺を守る為に人間を襲うことなんてあるはずがないというのに」

深い息を吐いてハルが目を伏せる。だがノアには、ハルがその問題を些(いささ)か深刻に捉え過ぎているのではないかと思えてならなかった。

「それほど悩むことでもないんじゃないかしら。ロビンは私とあなたを天(てん)秤(びん)にかけて、主人のあなたを守ったのよ」

ハルはかぶりを振って言う。

「あいつがロボットの俺を優先する必要はないんだ」

ノアはしばらく唾(あ)然(ぜん)としたまま、ハルの姿を眺めることしか出来なかった。

「やっぱり、気付いてなかったか」

ハルの冷たい声が、静寂に透き通る。

「俺はいわゆる人型機械だ。それに俺の主人——俺を作った女性が、ロボットを狂わせた張本人なんだ」

× × ×

白衣を羽織った女性はパソコンのディスプレイにじっと目を凝らしていた。簡素に切り揃えられた短い黒髪。色白の肌。まだ若い彼女は、年相応に幼さを見せることも多いが、研究に没頭していると人が変わったように気難しい表情になる。

「お疲れ様です」

彼がコーヒーを淹れたカップを差し出すと、彼女は力が抜けたように表情を緩ませた。

「ありがとうハル。頂くわ」

ハルは頭を下げ、他の三人の科学者にも順にカップを差し出す。それを皮切りに、背中を向け合っていた科学者たちは一様に身体を伸ばし、向かい合って談笑を始めた。

「ハルの淹れてくれるコーヒーは絶品だな。所長も少しは見習ったらどうですか」

「失礼ね。ハルの親は私なのよ。ハルにコーヒーの淹れ方を教えたのも私。つまりこのコーヒーは私が淹れたも同然」

白衣を着た三人の男は皆、顔を見合わせて肩を竦(すく)めた。三人とも彼女の淹れたコーヒーの味を思い出しているのだろうと、ハルは推測した。

彼女はこの研究所の所長ではあったが、紅一点である上に炊事などには特に疎(うと)い為、周りの研究員はよくそのことをからかっていた。

今でこそハルは、こういった会話が彼女らにとって有意義な時間であると認識している。だが、まだ自我を宿されたばかりの時分だったハルは、そんな他愛のないやり取りを仏(ぶつ)頂(ちよう)面(づら)でよく諫(いさ)めていた。それはまだ、彼が学習するに十分な情報が蓄積されていなかっただけであり、彼の親であるこの所長が悪戯(いたづら)のように言い聞かせた教えを忠実に実行していたからでもある。

「ハルも何か言ったら？ 母親がからかわれているんだから怒るとかないの」

「すみません。怒りに値するようなことがあったでしょうか」

三人の科学者は腹を抱えたり膝(ひざ)を叩いたりして笑い声をあげた。彼女はただ首を振っていた。

何か失言をしただろうか。ハルは表情を暗くして不安を露(あら)わにした。人間に危害を与えてしまうことは、彼の存在を否定することだ。ただ彼の思考プログラムは、危害の定義を些か広く捉えてしまっていた。

「そうやって真面目過ぎるのはあなたの悪い所ね。いや、作ったのは私だから悪いのは私か——ほら、また自分を責めない。確かに人間に危害を加えてはならないわ。でも時としては思考を柔軟にしなければいけないの」

「柔軟とは？」

顎(あご)に手を当てて考えながら、彼女はハルを手近な椅子に座らせる。彼女はハルに、さながら子供を励ますように前屈みになって言った。

「今その瞬間は悔しかったり沈んでいたりしているように見えても、一分後にはまた笑っていることだってあるわ。人の行動や感情は、どれも決して単一の変数で示すことは出来ないの。それら全てが未知数になって、場面に応じて解を変える。けれど、同じ喜びの感情でも、同じ解を導き出すことはない。それ位、人間は不規則で不条理な生物なの」

不規則で不条理と、ハルは困惑気に繰り返した。

「そう。だから目の前の情景だけでなく、前後の言動を考えて、想像するの——まだわからなくてもいいの。それは経験することでしか理解できないものだから。本当はもっと端的に理解させるプログラムを組み込むことも出来るけれど、それだけじゃあ駄目なの。あなたや他のロボットには、私たちと同じように経験して、悩んで、学んで欲しいの」

ハルは頷いた。彼女の手が彼の頭を撫でる。

理解したように見せているが、ハルが理解したのは字面の意味だけだった。言葉の裏に含まれた想いも、彼の頭に手を乗せる彼女の気持ちも、汲み取ることは出来ていなかった。

「なら所長も、ハルの気持ちをもう少し汲(く)み取ってやったらどうです」

椅子に背を預けて、研究員の一人がわざとらしい口調で言った。

「どういう意味よ」

「ハルだって、毎日コーヒー出したり掃除したり、研究の手伝いだけじゃあつまらないと思うでしょうよ」

「いえ、私は——」

ハルの言葉を遮って、男の口上は続いた。

「ロボットだって人間のように楽しみたい時もあるでしょうよ。遊びや恋愛にだって興味があるかもしれない。もしかしたら、浴びるほどの酒を奢(おご)って欲しいと考えているかも」

彼女や周りの研究者は呆れたように息を吐いた。

「何がハルの意思よ。あなたの願望でしょう。それに、以前に奢ったばかりじゃない」

「なら地下室にある所長のコレクションから一本——」

言い終える前に、彼女は目を血走らせて男を威嚇した。彼女がほとんど違法に私設した地下室には、収入の大半を使って収集した、古い酒や絶滅寸前とも言われる紙媒体の小説が置かれている。本の貸し出しや資料の閲覧ぐらいは彼女も許可しているが、飲めばなくなる酒に手を出すのは、この研究所では自殺行為に等しい。ハルも、研究員の誰かが無断で手を出そうとすれば、排除していいと命令されているほどだ。

「お聞きしてもよろしいでしょうか」

ハルが口を開いたことで、室内に漂っていた緊張感は消えた。

「いいぞ。気になることがあれば何でも聞いてこい」

「酒とは、それほどに美味しいものなのでしょうか」

頭を搔(か)き雀(むし)ってから、酒を奢(おご)って欲しいと言った研究員が答える。

「確かに旨いんだが、大事なのは酒を飲むと酔えることだ。酔うと仕事の疲れや一日の悩みを忘れられる。人体の損傷を補う為に、多少の機械化も進んでるが、酒が旨くなくなるなら身体はボロいままでいいと思うね、俺は」

「一種の催眠療法の効果があるのでしょうか」

「ある意味そんなところだ」

「今でこそ戦争もないけれど、明日どうなるとも知れないのは依然変わらないからね。除染区域といっても安全とはいき切れない。地球の寿命なんて誰も考えたくないし、ましてやそんな所に住んでる自分たちの将来も。だから必死に宇宙開発を進めて、あんな馬鹿でかい塔まで建てた訳だけど」

「ともかくそんな不安だらけの世界にいる内は、酒の需要が尽きないって訳だよ」

話を聞いただけでは、ハルの疑問が解消されることはなかった。

「酔った時の気分をハルが知るの、流石に難しいな」

「あら、ロボットが酔えないなんて、固定概念じゃない？」

沈黙が訪れ、研究員たちが苦笑いを浮かべても尚、所長である彼女は微笑を崩さない。

「どうやって？」

「ロボット向けの電子ドラッグでも作ろうかしら。ロボットが酔う薬」

「やめてくださいよ。ロボットのハックなんて重罪ですよ」

「ハッキングなんてしないわ。人間だって協調ギアを使って仮想現実の神様に酔っているじゃない。今ではロボットが私たち以上に復興に力を注いでくれている。そんな彼らの為に似た装置があってもいいと思わない？」

「そんなことをやられてSF小説よろしく反乱でもされたら、俺たちが酔うどころじゃなくなっちゃいますよ」

ハル以外の全員——言い出した彼女すらが表情を緩ませながらその様子を想像し、内心でぞっとしなさと呟いた。

「話ついでに、自分はちょっと酔ってきますよ」

言葉数の少ない研究員の一人が、気だるげに腰を上げて休憩室に行く。

「協調ギアなんて癖になるものかしら」

「ロボットと接してるか、アナログなゲームをしているだけで十分な所長には必要ないでしょうよ。引きこもって研究ばかりに没頭していると、あの感覚は欲しくなりますよ」

「皆さんは、何故それほどまで仮想現実専心されるのでしょうか」

協調ギアの見せる仮想現実についてはハルも知っている。しかしギアの見せる仮想現実、人間の感覚器官を刺激するだけであって、ロボットの彼には別段の意味をもたらさない。

「あの場所は、一人だろうと他人と感覚を共有できているのだと思える所なんだ。今はいち早い復興の為に、みんな多かれ少なかれ義務感を負っているだろう。もっと働かないと、って。けど仮想(あそこ)に浸っている間はそれを忘れられる。他の誰かも同じ痛みを感じて、同じ喜びを覚えていると知れる。そこに義務や規範、孤独がもたらす際限のない悩みなんてない。なんせ全部、神様が導いてくれるんだから」

「要するに、協調ギアも酒も辛いことを忘れる為にみんな必要としているんだよ」

ハルの疑問は一層深まるばかりだった。思考回路が幾つかの仮説を立てるが、実証できない仮説はバグのように彼の機能を阻害するだけだった

「気にすることはないわ、ハル。今は精々、データの誤作動

で酔っているように見せかけるくらいしか出来ないわ。でもそれは、世間ではまだロボットが使役される機械でしかないからよ。復興期を共にしてきたロボットのことを、一同僚として認める風潮も広がってはいるけれど、それはまだ愛着のある道具に対して抱いているようなもの。彼らは原則に縛られた機械でしかない」

ハルは理解に苦しんだ。彼女の言葉は、自らが作り出したロボットの存在理由を否定しているのではないか。それを伝えると、彼女は柔和な笑みのままかぶりを振った。

「私はあなたたちに、原則があるからではなく、原則を守る独自の意思を持つ存在になって欲しいの。人が殺人を咎(とが)めるように」

「その為には、まず俺たち人間が、原則なしのロボットを認める必要がありますけど」

「それは不確定で危険です」

「そうね。でも私は出来ると思うの。勿論すぐには無理よ。きっとそうしていく為には、ロボットが人間のような文化や教育や宗教、そういったイデオロギーを確立できなければいけない。人間がそうだったように、それは遠い道程でしょうね」

教えならば人間のプログラムがある。宗教ならば、崇拝の対象はまさしく人間ではないか。回路が導き出した答えを、ハルは口にしなかった。彼女がまた首を振るであろうことは、彼の経験則でわかったからだ。

「そうなれば私たち人間は、異文化に触れるような感覚を味わって、あなたたちを拒絶してしまうかもしれない。困難で、苦痛に思えるかもしれない。でもその関係は、今と変わらないと思うの」

「というと？」

「だって今も、人間とロボットはお互いの間違いを正している関係じゃない。私たちがハルに何か教えているように」

目を細めて、ハルではないどこかを眺めるようにして言う。彼女がロボットに拘(こだわ)るのは、幼子の頃ロボットに助けられたからだとはハルは何度も聞かされている。ロボットに関する彼女の思い出話は、一度たりとも同じだったことはなかった。

はじめは工事現場で命を救われたという話だったが、別の話をするにつれて、話は感謝に足る物が疑問になるほど些(さ)細(さい)な話題となった。果てにはコーヒーを淹れてくれたのだと、ハルが普段しているような何気ない行為となった。彼女はその一つ一つを、データに保存したように明確に覚えている。

「まあ間違いを正されるのは、ハルたちロボットよりも俺たち人間の方が多いですけど」

ハル以外の全員が、肩を震わせて苦笑する。

「けれど、私たちが正さないといけないこともたくさんあるわ。人間とロボットの誰もが遠慮なく、使命感でもなくそうできる。そんな関係を築けて私たちは、真の意味で酒を酌み交わす関係になれる」

彼女の言葉が、そうした人間の感傷的なものからであることはハルも理解している。だがそのことを踏まえても、ハルが彼女のロボットへの愛着を説明できるほどには足り得てはいなかった。

「所長の言うことには現実性がありません。私には理解しかねます」

「そうかもね。私がまた間違ったことを言ったら、あなたが私の間違いを正してね」

ハルは戸惑いながら、彼の中に産まれた曖昧なものを言葉にした。

「ですが、あなたたちとお酒を酌み交わせられれば良いとは、私も思います」

誰から同意を求められた訳ではなく、ハルは言葉を次いだ。彼女らはそんなハルを見て目を瞠(つむ)り、顔を合わせて笑みを噛み締めた。

「じゃあ今度飲ませてあげるわ」

「それは無理でしょ。いくら人工筋肉で見せかけていても、ハルの身体に流れているのは紅い血じゃなくて透明な冷却液ですよ。それより、ハルには簡単に許すんですかあ」

「無論、明日すぐでもなければ無条件でもないわ。そうね……その格式ばった口調が砕けたらにしようかしら」

「自分でプログラムしておいて勝手だなあ」

「経験して覚えなきゃ意味なんてないのよ」

彼女らのやり取りに、ハルは困惑していた。

——まずは一人称を変えてみるところから始めればいいのか——

\_\_\_\_\_。

× × ×

地上は真夜中の闇に包まれている刻限。地上に出ていたハルは地下へ戻ってきた。肩に狙撃銃を抱え、ホルスターには榴弾銃と慰め程度の拳銃。

街では自動人形の警戒が一層強化されていた。あんな騒動を起こした以上、ハルも迂(う)闊(かつ)に姿を晒すのは危険だった。

地下の入口まで辿り着いて、ハルは自分の状態を再確認した。損傷は軽傷だったが、二体の標的を仕留めたことを考えれば十分過ぎるほどだ。

瓦礫で偽装した入口を除けている途中で、ハルの身体が傾ぐ。視界にはまた、ノイズの嵐。けたたましい悲鳴をあげて倒れたロボットの姿が、彼の脳裏に深く刻み込まれていた。

ハルはふらつきながら研究室に戻り、そのまま無線機の修理に取り掛かった。ノアの持ち物であるそれを、彼女自身から直せないかと頼まれたものだ。それほど難しい代物じゃない。部品が十全ならすぐにも直すことが出来る。だが直ったとしても、彼女には意味のない代物だろうが。

横目でロビンの姿を見る。ロビンは夕刻になるとスリープする。ハルの場合は夜型の生活をしていた研究員たちに合わせて、眠るのは朝の時間に設定されている。

ノアが就寝用の部屋で眠ってから、ハルはロビンを点検していた。ロビンがノアを襲うことが起きないように、ハルはロビンのプログラムに手を加えた。みだりにロボットの思考を書き換えることは、彼女ならば怒るかもしれない。

思考の対象が、再びノアに移る。目覚めれば彼女はすぐにでも地上へ出て、仲間の元に帰ろうとするだろうか。少なくとも、外が騒がしい内はそんな愚行には走らないか。

ならばその後は？ 彼女はここを出て行き、ハルはまた主の命令と心中する機械に戻るのか。そして彼女を——ハルは頻(しき)りに首を振った。

だが彼女が出て行けばどうなる。この街はまた戦場になるか。例え彼女がここにも、彼女の仲間という者たちが大挙してやって来るのなら、戦いはこれまでのようなイタチごっこでは済まないだろう。

退廃した街には銃弾の雨が降り注ぐ。この場所にも、いつか。

地上の戦力はハルのような人型機械(ヒューマノイド)一体にとって無限に等しい。戦いが激しさを増せば、彼に出来ることは戦場にそよ風を吹かせる程度しかないだろう。

争いを少しでも早く終わらせる、それが間違いを正すことになる。彼女の最後の命令を、彼は反(はん)芻(すう)する。その為にすべきことはわかっている。だがそれが正しいことだという確信はなかった。霧のように捉え所のない疑念ばかりが、彼の思考を漂っている。

ハルは立ち上がり、腰のホルスターに手を当てる。自動人形と比較すれば火力に乏しい拳銃が、そこに収められている。

ハルは広間に出て、真っ直ぐ寝室のある部屋へ向かった。鍵はない。時には研究員とも寝食を共にした場所だったが、彼女に手を出そうなどと蛮勇を振るえる男は、この研究室にはいなかった。

扉を開けるが反応はない。

暗闇の中を、ハルは躊躇(ためら)うことなく進む。彼女はベッドに横たわっていた。死んでしまったように、静かな表情だった。

傍(かたわ)らには彼女の言う、仮想現実を見せる協調ギアと呼ばれている装置が置かれている。彼女の言う神——マキナの声を聞く為の依代(よりしろ)。何十年も前、人々はこれと同じ装置を使い、神にも似た存在を掲げることで自身を奮い立たせた。機械にとっての人間のような、不可侵の存在。

ギアの見せるその存在を誰が作り出したのか、知る者はいない。知る者がいてしまっただけは意味のないことだ。彼はそう教えられたことを記録(、)している。

ハルは静かに、針に糸を通すような繊細さでホルスターから拳銃を取り出す。安全装置を外し、そしてその銃口を彼女に向ける。今まで幾体もの敵を排除してきたように、トリガーを引くだけだ。

引き金に指を当てようとして、動きが止まる。ハルの指先が、痙(けい)攣(れん)を始めたように震え出した。

ハルの脳裏に、彼を作った女性の姿が過ぎる。ノアの容姿は彼女と瓜二つだった。外見だけではない。初対面の相手にも朗(ほが)らかに振る舞い、辛いことがあっても気丈に振る舞って見せるノアの雰囲気は、どことなく彼女に似ていた。

そう錯覚してしまうと、ぶるぶると震えるハルの手は、拳銃を握ったままゆっくりと持ち上がり、銃口を自身のこめかみに向ける。

長い間、彼は動きを止めていた。鼓動が激しく脈打つように、ハルは肩で息をしていた。ノアが目を覚ます気配はない。

彼は拳銃をホルスターに素早くしまい、部屋を出た。

研究室に戻ったハルは、機材の収納された棚を物色した。取り出したのは、ノアの傍らに置かれていたものと同じ、協調ギア。ハルが彼女に、なくしてしまったと答えた装置であり、ロボットの彼にとっては無用の長物であったはずの幻。

ハルは椅子に腰掛けて、頭にギアを付ける。思考を無にして、側面にあるスイッチを入れると、彼の視界は一度暗闇に覆われる。やがて目の前に幾(き)何(か)学(がく)的な模様が現れると、現実の光景は引き伸ばされたように遠ざかっていった。

——彼女ならば、答えを教えてくれるだろうか。

当て所ない思考の答えを求めるように、彼はその声を求め、間もなくして感覚が鮮明になった。

彼が居たのはぐらぐらと揺れる電車の中だった。戦争が起こるより遥(はる)か以前の乗り物だ。かつてはこの無駄に重い乗り物を公共のものとして利用し、目的地の付近に移動していたと言う。

電車が停まり、扉が開かれる。駅の名前が告げられるがそれがどこなのか彼にはわからない。

扉の前に立っていた彼は、降りる人間の邪魔にならないように一度電車から降りた。それから誰も降りてこないのを確認して、電車に乗り込もうとした。

だが唐突に、彼は押し出された。誰かが手を出したようには見えなかったが、肩を小突かれた感覚だけは残っている。

彼が乗る間もなく扉は閉じられ、電車は次の駅へ向かって発車してしまった。

電車の去った駅はもぬけの殻だった。電光掲示板が、先程の電車が最終であったことを告げていた。

仕方なく、彼は駅を後にして地下を抜け出た。誰かに押された肩は、手形が付いているのではないかと疑うほど、不快な感覚を残している。その不快感は次第に、自分を押し出した人々への苛立(いらだ)ちと怒りに変わりつつあった。

気の晴れないまま抜け出た場所には、雲一つない空と、人工物の影も見られない自然の光景が広がっていた。彼方には山の稜(りょう)線(せん)が広がっている。足元に広がる草原には、人の歩く道などないというように、背の高い草が伸びている。

彼は足で草を掻き分けながら歩き始めた。たとえ引き返そうにも、彼が振り向いた時、駅に通じる道はすでになくなっていただけだ。他に見えるものもなかったのだから、彼は遥かそびえる稜線に向かった。

足元の雑草がちくちくと肌を刺す。虫が這(は)い登ってくる搔痒(そうよう)感は耐え難いほど彼の正気を蝕(むしば)んでいく。どうして俺は一人で放り出されなければいけなかったんだ。彼らは何故に俺を拒絶しなければいけなかったんだ。

汚れた言葉の一つ一つが、体の中で水泡に帰していく。割れた泡は体内に空気となって広がり、苦痛へと変わっていく。

悶(もだ)えながら彼は苦しみの言葉を口にした。すると、老婆のような落ち着いた声はその問い掛けに返答した。はっきりとは聞き取れない。だがその声がこの世界の主である女性——マキナと呼ばれていた女性——の声だということはわかった。彼にとっても聞き慣れた声だ。

「あなたは誰なんだ」

「私はあなたの手を取る為にここにいるの」

噛み合っているようで、どこかちぐはぐな返答。けれど、孤独な世界で聞こえた声に耳を傾けることは、気味が悪いほどに心地よいものだった。

「あなたはどこにいる」

「あなたのすぐ近くにいるわ。目の前にも、後ろにも」

「何も見えないよ」

「今はまだ見えなくていいの。私がするのは、あなたの手を取るように声をかけて、他の人たちのところに導くだけ」

「他の人？ 俺を電車から無(む)慈(じ)悲(ひ)に押し出した人間たちのことか」

「そんな人たちはどこにもいないわ。彼らはあなたの思考が生み出したものだもの」

「思考だって？ 俺の思考がどうして俺を追い出す」

「あなたは自分で、自分の存在を否定してしまっているのよ」

「俺が？」

彼の前を風が吹き抜ける。マキナがこっちに歩けと言っているようだった。疑念を宿したまま、彼は導かれるままに歩いていき、地面の大きな石に蹴躓(けつまづ)いた。

膝から流れ出す透明な液体。人工筋肉の冷却液は彼にとって血にも等しい。だらだらと零れる液体は、あるはずのない痛覚を一層刺激する。

「痛い。どうしてこんな思いをしなければならない」

「転んだんだもの。痛いのは当然でしょう。生きていればそんな思いをすることばかりよ」

彼女の嘲るような言い種に、彼はうつ伏せに倒れたまま奥歯を噛み締めた。彼は考えた。どうしてこんな場所に一人で放り出されなければいけないのか。だが次第に、そんな理由を考えるのも億(おつ)劫(く)う)になった。ここには自分ただ一人しかいない。マキナは声をかけるだけで姿を見せてくれない。もしかすると、彼女の声も俺の思考が作り出した幻か？ そうかもしれない。彼女の言う通りなら、俺はあの電車で、自分から押し出されることを望んだことになる。なら彼女が俺を導いてくれないのも道理というものだ。

理不尽に対する憤(いきどお)りに苛(さいな)まれて倒れる彼を、誰かが急に引っ張り上げた。彼の身体は重力を失ったようにふわりと持ち上げられる。

彼の目の前に、どこからか聞こえていた声の主である老婆がいた。無論、彼を引っ張り上げたのは老婆ではない。老婆の隣に、彼よりも大柄な男と、彼よりも頭一つ背の低い女がいた。

きっと、彼女が引き合わせてくれたのだろう。彼はそう思い、瞳に大粒の涙を湛(たた)えた。一人ではなかったことの喜び、ようやく会うことの出来た仲間に、彼は惜しみのない礼を言った。目の前にいる彼らは、敵対するどんな存在とも一緒に闘ってくれるような安心感をくれた。

ハルは半ば強引にスイッチを切り、頭のギアを外した。目元に手を触れてみるが、涙は流れていない。当たり前だった。ハルにはそもそも涙を流すことの出来る機能は搭載されていない。

立ち上がり、ハルは腕を振り上げて勢よく壁にぶつける。人工の腕と壁が衝突する重い響きの音。こうすれば人間に痛みがやってくるのだという情報をハルは得たが、実際に痛覚を刺激することはない。

ハルは再び、ノアの眠っている部屋に行った。

——大丈夫だ。

今度は何の葛(かつ)藤(とう)もなく、彼はただ引き返す。

ハルは自分に充電用のプラグを繋いでから、ぐったりと椅子に倒れた。

目覚めたハルが広間に出ると、ノアはロビンと一緒にいた。向かい合うように床に座り、ノアはその狭(はざ)間(ま)に視線を落としていた。視線の先には、煤(すす)に汚れたチェス盤が置かれている。

「チェスなんて知っていたのか」

ハルに声をかけられたノアは、びくっと肩を振るわせてから、彼の姿を確かめて安堵する。

彼女が地下のこの施設に身を寄せてから、三日が経過していた。最初はロビンやハルを見る度に敵意を隠さず、口を開けば地上に出るの一点張りだったが、今ではゲームに興じる程には気を許していた。

「そういうゲームがあったことぐらいはね」

視線をチェス盤に向けたまま彼女が答える。ハルは慫(ぶ)然(ぜん)とした表情で椅子に腰掛けた。

「昨日も地上に出ていたの？」

「ああ。予想通り、奴らは警戒を強めている。今逃げ出すのは自殺行為だろう」

「そう」

予想通りの答えだったからか、ノアは特に落ち込む様子も見せなかった。

ハルの視線が、二人の間に置かれた盤面に移る。

「ルールはわかるのか」

「ロビンが知っていたから教えてもらいながらね。あなたが教えたの？」

「処理能力のテストを兼ねてだが」

ロビンが短い腕を伸ばして器用に駒を動かす。ノアもそれに応じてすぐに駒を動かした。

「どうしたの、じっと見て」

「なんでもない」無表情のまま答える。

「もしかして怒っているの？ 自分は危険を冒して様子を見に行っていたのに、私が遊んでいたから」

「人間を第一に考えるのが俺の定めだ。そこに怒りを介在する余地なんてないさ」

ハルにとっては事務的で義務的な言葉だったが、ノアには皮肉としてしか聞こえなかった。

「随分と落ち着いているように見えたからな。少し前までは外に出ようと焦っていたが」

「焦っても仕方がないと思っただけよ。それに外に出ようとしたら、ロビンが道を譲ってくれなかったわ」

「それはよかった」

「そうね」ノア言ってひきつった笑みを浮かべる。

「外の様子は今後も俺が見てくる。君は存分に、チェスに興じていてくれればいい」

「そうさせてもらうわ。気も紛れて丁度いいもの」

ノアは言うてから駒を動かす。チェックメイトです、とロビンの高い声が静まった部屋に響く。

ハルが盤面を覗き込む。ロビンは初心者ノアに容赦なく勝っていた。

「ロビン、お前はもう少し初心者に対する接し方を学習すべきだな」

「お言葉ですが、相手が初心者といえども手を抜くのは、相手に対しても失礼ではないでしょうか」

ハルは呆れたように首を振る。おそらくは、ロビンが読んだことのある小説の受け売りだろう。

ハル自身が作ったロボットが、彼の思惑とは別のことばかりすることに舌を鳴らす。

「何だか面白いわね、あなたたち」

横で見ていたノアが頬(ほお)を緩めていた。ロビンはロビンで、「お褒めに預かり光栄です」と的を外れた発言をしていた。

ハル一人が、表情を曇(くも)らせていた。この状況を望ましくないと考えている訳ではなく、ただ戸惑っていた。

「そういえば、チェスをしていて思いついたのだけれど」

ノアは取って付けたような理由を持ち出し、ハルに視線をやる。

「やっぱり効率的に戦うには、集団での戦法が必要よ。だから、あなたも私たちと一緒に戦わない？」

ハルは水に打たれたように目を丸くする。想定外の彼女の申し出に、驚きを表さずにはいられなかった。

「何が焦っても仕方ない、だ。俺を懐(かい)柔(じゆう)してすぐにでも外に出ようとしている」

すぐに平静を取り戻したハルの言葉に、彼女は視線を外して苦笑する。ハルよりもどこまでも人間らしい仕草に、彼は面影を重ねた。

「けれど利害は一致しているでしょう。偵察と言っても、あんな物騒な武器を持ち出していたのだから戦う意志だってあるんでしょ」

「戦う意志は勿論あるが、利害が一致している訳じゃない」

「どういう意味？」

「目的が違うということだ。君たちは権利の為に戦っているが、俺はもっと利己的な理由で戦っているに過ぎない。それ以上でもそれ以下でもないんだ」

ノアは責めるように目を眇(すが)め、隣にいたハルが不(ふ)明(めい)瞭(りよう)な言い回しだとハルを詰(なじ)る。

ハルは頭に手を当てて、観念して口を開く。

「俺を作った女性が、ロボットを狂わせた張本人。そう言っただろ」

「ええ。あの時は詳しく聞く暇もなかったけれど」

「人間を守るのはロボットとして当然のことだ。だが目的として俺が行うのは、彼女——俺を作った人間が犯した過ちを正すことに他ならない」

「同じくその女性の作ったあなたが暴走したロボットを破壊することで、お母さんの汚名返上を果たすという訳」

「体裁よく言えばそういうことだが。もっとも、俺も他のロボットと変わらない、ただの欠陥品だ」

「あなたが欠陥品？」

床から立ち上がったノアは、ハルの正面の椅子に座る。ロビンは依然、机の脇で待機していた。

「そうは見えないけれど。あなたがロボットということだってまだ疑っているぐらいよ」

「そう言ってもらえるのは光栄だが、俺はロボットだよ。身体的な証拠だって、見せようと思えばいくらでもある」

「地上のロボットのように、人間に牙を向けることだってないじゃない」

「表面上はそう見えるだけさ。けれど、俺も人間を殺したことがある」

ノアの表情が強(こわ)ばり、ぴくりと身体が動いた。

「タチの悪い冗談なら止めてくれる？」

「冗談なんかじゃない。本当のことだ」

ハルは硬い面持ちのまま彼女の言葉を否定する。自(じ)嘲(ちよう)めいた笑みでも繕(つくろ)えればいいのだろうが、彼には出来なかった。

「昔話でもしながら説明しよう。人型機械が反乱を起こす前、人型機械の自殺が取り沙汰された。知っているか？」

「人型機械の自殺……記録では知っているわ」

なにせその事件こそが、機械の反乱に繋がった出来事だと言われているほどに大きな事件だ。知らない人間はいないだろう。

「自殺した原因は世間では色々と言われているが、俺の親——人型機械の第一人者であるこの研究所の所長は、俺に言った。彼らが自殺するのは、彼らが自分の存在そのものが人間を殺すと判断したからだ」と

戦争から復興するにあたって、ロボットが活躍したのは語るまでもない事実だった。汚染の影響で多くの女性が子供を産めない身体になった中、人の形を模したロボットは増え続け、我が子のように可愛がる人間も徐々にだが増えていった。ハルを作った女性も、その例外ではない。

「ロボットを我が子のように……今では考えられない話ね」

ハルは神妙な面持ちになった。別人とは言え、彼の親である女性と瓜二つのノアが、そんな言葉を零すことに違和感を覚えないはずがない。

ハルは咳払いをして、話を戻した。

「増える兆しのない人口に対して、ロボットの増加は止まるところを知らなかった。技術が確立すれば、労働力は不要になることはないからだ。

そしてロボット——殊(こと)、人型機械の数は、人類の数を超える勢いで増加した。人間よりも優れた処理能力を持った彼らの働きは、当然に人間のそれを遥かに上回り、宇宙空間での労働力はロボットがほとんど全てを担っていると言っても過言ではなくなった。

加えて、技術の進歩とともに人間に近い感情を手にした彼らは、命令がなくとも人間の行動を推測して行動するようになった。彼らは人間からすれば完璧だった。まるで人間の上位個体のようですらあった。けれど彼らは、やはり機械でしかなかったんだ」

人間の為に働き、人間の命令に従い、人間の安全を第一に行動する。技術がいくら進歩しようと、彼らは機械の枠組みの中でしか作られなかった。だからこそ彼らは、自ら命を絶たざるを得なくなった。

「もしかして、こう言いたいのか？ ロボットの存在が人間、いいえ、人類そのものの存続を危ぶませてしまう。だからロボットは、死ぬしかなかったと」

「そんなところだ。人型機械の学習機能は、その未来が訪れるであろう確率が日増しに高くなっていることを理解した。そして人型機械の生産台数が一定の値を超えたところで、彼らは自らの身体を破壊し始めた」

街の首脳部は、掌(てのひら)を返したように人型機械の是非を問い質(ただ)し始めた。人の形をする被造物は我々の尊厳を奪い取る。感情機能を顕著にしたロボットなど、いつ反抗し出すかわからない。今更のような疑問を、人々は不安の捌(は)け口としてぶつけた。

「けれど、実際にその通りになった。ロボットは人間に反旗を翻(ひるがえ)して、今もその姿勢を崩さない」

「現実には確かにそうだった。けれど、その原因を作ったのも人間だ」

「ロボットを酷使し過ぎた人間への報い？」

口調こそ冗談めかしていたが、声音には苛立ちを覗(のぞ)かせている。

「そんな哲学的な話じゃないさ。暴走するはずのないロボットが暴走したとしたら、その理由は製作者の人間の行いに他ない。そんな単純な話だ」

ノアはムツとした表情で彼を見上げる。回りくどい言い回しだったのは、何もハルが好んでした訳ではない。その先を口にすることは、ハルにも抵抗があった。

「そしてその過ちを行ったのが、俺を作った女性だったよ」

ロボット工学の第一人者でもあった彼女は、きっと誰よりもロボットを愛していた人間だった。そんな彼女が、自ら命を絶つロボットの姿を黙認出来るはずがなかった。

「彼女の作り出したプログラムは、ロボットの大原則を破壊した。正確にはその定義や彼らの自己認識を書き換えた」

そのプログラムは、ロボットに種としての自立を促し、自らを使役する存在からの束縛を解き放つ。人間に従属する必要がないよう、ブラックボックスである原則を覆(くつがえ)すものだった。

「ロボットも人間のように自ら学習し、自らの意志で独立する。そしていつか人間と本当の意味で対等な関係を築く。そんな夢を抱いた彼女には、無理にロボットの意識を変えるようなプログラムを作ることは苦渋の選択だったに違いない」

だが機械としての使命を捨てることの出来ないロボットを救うには、それしかなかった。

ロボットの全神経に直結する原則を騙(だま)すのは不可能に等しい業(わざ)だ。常に研究の前線に立ってきた彼女にしか出来ない所業(しよわざ)だった。

当然、そんな彼女の行いが看過される訳はない。彼女は罪人として追われる身になった。

「彼女はこの施設を捨ててどこかに身を隠すと言った。俺は彼女を止めるべきだった。逃げ道のない逃避行に出向こうとする前に、自分の命を投げ打つような研究を始める前に。彼女の身近にいた俺には出来る

はずだった。だと言うのに俺は、止めなかった。彼女の身が危険に晒(さら)されるとわかっていたのに！」

ハルの語調が次第に早く、強迫的なものに変わるのを見て、ノアは呆然とした。

「でも、それであなたがその女性を殺したことにはならないわ」

「違わないさ。俺は彼女を見殺しにしたのも同然だ。確かに彼女の精神は壊れかけていた。俺までが彼女を否定すれば崩れてしまうほどに。でもそれは間違いだった。もしどちらを選んでも彼女を守れないと判断したのなら、俺も他のロボットと同様に自殺していたはずだ。それなのに俺は、彼女の間違いを正すという名目を盾に、戦いの度に逃げ帰って、今でもまだ……」

ハルは俄に頭を抱え出した。彼の記録から呼び覚まされた事実は、彼のロボットとしての存在意義を脅(おびや)かす自己矛盾を引き起こしていた。

「声を荒げてすまない。この話題になると、どうやら思考が乱れてしまうらしい」

「こちらこそ、無理に聞いてしまってごめんなさい」

と言うものの、ノアの態度は明らかに一歩退いたものになっていた。

「見ての通りだ。俺も他のロボットと同じ、それよりも危険なものだ。気を緩め過ぎない方がいい」

ノアは下唇を噛み潰して、頷いた。

「一ついいでしょうか」

緊迫した雰囲気の中、ロボットの平穏な声が目立たずに響く。そういえばロビンもいたのだと、ハルはその時になって再認識した。

「ハルはどうしてそんな状況下で、私のようなロボットを作ったのでしょうか」

頭を抱えていたハルは、ようやく顔を上げる。

「彼女の研究は本来なら間違っていなかったと証明する為。俺は、俺のような欠陥のないロボットを作ろうとした」

「律儀ね」

「いいや。どう言い繕っても、主人に逆らった自分の存在を肯定する為にしか過ぎない。自己を守らなければならないという原則は、結果的には今も昔も破られていないのだから笑いものだ」

そして、待っているのだろう。戻ってくるはずのない彼女の許しを得られることを。

「まあ欠陥も何も、出来たのは見ての通りの代物だが」

「今の発言は私に対する侮辱だと推察します。わたしはハルほどに不安定で欠陥の生じやすいロボットではありません」

やはり壊れているのではないか。そう考えてからハルは自分の考えを否定した。壊れているのは自分も同じではないか。

「それでもやっぱり私には、あなたが壊れているようには見えないわ」

「慰めならよしてくれ。俺はロボットだぞ」ハルは精一杯に皮肉に歪む表情を作って見せたが、ノアは意見を変えなかった。

「正直な感想よ。人間の為に自殺したなんてロボットよりも余程、今でも命令を忘れないあなたの方が立派なロボットだわ」

「それだって自分を肯定する為に——」

ノアは目を細めて、手をそっとハルの頭に置いた。正しい反応がわからずに、ハルは目を大きくして彼女をぼうっと見ていた。

「私にとってロボットは憎い相手だけれど、あなたたちのことを嫌いにはなれないわ。それだけでは、あなたの母親の研究が間違っていなかったことにはならない？」

ハルの視界がノイズによって歪む。目の前にいる女性が誰なのか、ハルには一瞬、判断が付かなかった。

「馬鹿馬鹿しい。ただの詭(き)弁(べん)だ」

ハルはノアの手をそっと払いのける。

「まあ赤の他人の私が言っても説得力もないか」

彼女は払いのけられた手をひらひらと振って、小波を打ったように顔中に無邪気な笑みを広げる。面影と雑音がハルの目(ま)蓋(ぶた)に交錯する。

「他人の意見次いでだけど、私がその人の立場なら、あなたには無理をしてまで命令に従うより、違う目的を探して欲しいと思うけどな」

鼻を鳴らし、ハルは彼女のいかにも人間らしい意見を聞き流した。ロボットの自分が無理をしているなんて、ある訳がない。

ノアが寝室で眠りについたことを確認してから、ハルは武装を整えた。いつも通り、人間が持って歩くには適さない狙撃銃を悠々と抱えている。

地上は真夜中だった。だからといって、ハルが闇(やみ)に足を縫(もつ)れさせることなどありはしない。ハルは地下施設から十分に距離を取った後、見晴らしのいい廃屋に忍び込む。

素早く安全な狙撃地点を確保し、双眼鏡を覗く。街の見取りを全て把握しているハルには、敵がいるであろう場所を捜すのも難しいことではなかった。

煙った夜間の向こうで、銃声の雨が降っている。ハルのいる場所とは随分と離れた場所だが、その音はハルに、如実に戦場の気配を感じ取らせた。

ノアの仲間たちが、本格的に侵攻を開始したのだろう。近隣を双眼鏡で覗いてみても、自動人形たちの警戒態勢がより盤(ばん)石(じやく)になっていることが窺(うかが)えた。

ハルは構わず射撃の体勢に入り、獲物に照準を合わせる。標的は三体。いずれも遠方からの狙撃には警戒が薄いようだ。どちらの布陣に加わっている訳でもない異分子の、最初の狙撃を予測することは敵にとって至難の業だろう。

的外れな方向を警戒する標的に対し第一撃を繰り出し、素早く回避行動に移る。深追いすれば、以前のように手痛い反撃を食らう破目になるだろう。

いつも通り、ただ標的を仕留める為だけの機械になって、弾丸を放つ。それだけだ。

照準を合わせながら、ハルは昼にノアやロビンと過ごした時間を思い出していた。

ハルとロビンがくだらない口論をして、傍(はた)から聞いていた彼女——ノアが笑う。その光景は、彼がずっと待ち続けていたものであり、彼女が望み続けた光景ではなかっただろうか。

戻ったら、酒でも飲み交わしてみるか。確か一本だけ無事だった酒瓶が残っている。彼女が生涯に渡って保存してきたものだ。もしノアの言うように、ハルが彼女の研究の正しさを証明しているとすれば、今なら許してくれるかもしれない。

——馬鹿馬鹿しい。それこそただの詭弁だ。

ハルは口に微笑を浮かべ、引き金に指を当て、指へと慎重に力を込めていく。そんなはずはない。ハルは気の迷いを嘲笑(あざわら)った。彼女の研究は間違っていなかったと信じているが、その研究が実をつけるのはまだずっと時間が必要だった。

自分のような不出来な存在が、彼女の研究の結実であるはずはない。ハルは否定した。俺に出来るのは、本能のままに人間を守り、彼女の命令に従うことだけだ。

引き金を絞ろうとした刹那、ハルは指先が痙攣を起こしたかのような違和感を覚える。構わず指先に力を込めようとするが、彼の狙撃を阻むように、視界は断続的なノイズに歪んだ。

自分の身体が躊躇(ためら)っている、ハルはその事実だけを理解した。それでも彼は、何度も空で指を動かし、引き金に力を込めようとする。

耐え難い感覚に支配されて歯軋(はぎし)りしながら、ハルは無理やりに力を込めて、銃弾を放った。

朝になった頃、覚(おぼ)束(つか)ない足取りで、ハルは地下の階段を下りていく。腰に携行していた拳銃以外の武装は、全て地上に置いてきている。余計な重量を抱えて逃げる余裕は、今の彼にはなかった。

地上では、お互いの勢力が競うように戦線を拡大していた。

仕留めることができたのは一体。他の標的は取り逃がし、彼の銃声を皮切りに戦闘は始まった。両陣営が纏れ合うように弾丸をやり取りし、不気味な静けさは荒々しい喧噪(けんそう)へと変わり果てた。ハルはその混乱に乗じて、どうにか逃げ帰ってきたに過ぎない。

感じるはずのない痛みという感覚が、彼の身体を襲う。困惑に悲鳴をあげる頭を左腕で押さえて、ハルはひび割れた様に歪む視界を塞(ふさ)いでいた。

頭を抱えながら、ハルはどうしてそんな異変が起きたのかを考えた。幾つかの記録が欠損した映像のように断片的に思い起こされる。記憶ギアの見せた草原、マキナとの他愛のない会話。ノアとのやり取り。彼の目的を阻害している要因は、彼自身わかっていた。その障害(バグ)を取り除く術も。

階段を下り終える頃には、その不気味な感覚は消え去っていた。苦悶の表情を押し殺し、普段の冷静さを取り繕う。扉を開けると、仁王立ちしたノアとロビンが睨み合っていた。

「今日は、遅かったのね」

「引き際を見誤っただけだ」

「地上が騒がしいのなんて、ここにいても十分に伝わるわ」

ここ数日柔らかかったノアの表情に、戦場で張りつめていた戦士の陰しさが戻る。

「私の仲間が来ているんでしょ？ なら私もすぐに……」

「やめるべきだ。確かに君の仲間は戦っている。だがやはり君と同じような残党だろう、戦力は圧倒的に足りていない」

「だからって見過ごせと言うの」

眉を逆立てて、ぐっとにじり寄る。湛(たた)えた怒りは自分の無力さを理解してのものだろう。

「ならあなたも手伝ってくれない？ 二人いれば戦略の幅もずっと広がるわよ」

「現状はそう簡単には変わらない。それに昨日も言ったはずだ。俺が戦う理由は君とは違う」

「そんなの方便でしょ。人間を守ることが使命なら……」

「無駄だと言っているんだ！」

突然の怒号によって、互いに閉口する。ノアにとっては勿論、苛立ちに似たその叫びはハルにとっても予想外の行動だった。

ハルの視界が、またしても砂嵐のように吹き荒れたノイズで明滅する。砂(さ)塵(じん)の一つ一つが理性を破壊していき、ハルは徐(おもむろ)に拳銃を掲げる。

目の前に立ち塞がる女が、途端に邪魔な存在に思えてならなくなった。先刻、失態を見せたのも全てこの女のせいだとさえ考え始めた。

拳銃を構えたハルは引き金に指を伸ばす。そのまま衝動に任せるように、狙いを彼女の頭に定めると、脇に控えていたロビンが間に割って入る。

「今のあなたの行動は合理性を欠いています」

言われてようやく、ハルは冷静な思考を取り戻して拳銃を下げた。

「人間を守ることが使命だと主張するなら尚更だ。俺は足を引きちぎってでも君を止めるべきだと判断する」

ノアは苦虫を噛み潰したように口を歪め、それでもすぐに笑みを見せた。

「そうね。あなたはただ命令に従って、本能の通りに行動しているんだものね。私ばかりが無理を押し付けてしまっごめんなさい」

彼女の言葉の一つ一つが、酷く皮肉に突き刺さる。

ノアは元気がない足取りで寝室に引き返していく。床に銃口を向けたまま、ハルの手は震えていた。制御のままならなくなった彼の手は、今にも発砲してしまいかねない程、危なげに力が込められている。

「大丈夫ですか」

電子的な声でロビンが問い掛ける。

「少し眠る。街の監視と、ノアの動向にも目を離すな」

ロビンは駆動音をたてて小刻みに頷いた。

ハルは研究室に戻ると、協調ギアを取り出した。その行動は一種の逃避のようなものだった。

充電用のプラグを首元に繋いでから椅子に腰掛けて、ギアを頭に装着する。

目の前が暗闇に覆われて、お決まりの幾何学的な模様を映し、現実が遠ざかっていく。

彼はまた電車の人混みに放り込まれ、理不尽に電車から追い出された。

不快感、孤独のもたらす不安。曖昧な感覚に襲われながら、彼は仕方なく足を進め、見覚えのある草原へと出る。

彼は周囲を見渡して、彼方に広がる稜線とは反体の方向に歩き出す。足元の草は棘を突き出し、地面から這ってくる虫はやはりどうしようもない搔(そう)痒(よう)感(かん)をもたらした。

当て所なく歩くと、草原は次第に衰えていき、命の息吹をまるで感じられない更地となっていく。果てに辿り着いたのは、日照りの激しい砂漠だった。

増々募っていく不安感と、喉を搔き筆(す)らずにはいられなくなる渴(か)きが襲ってくる。彼は呻(うめ)きながら、その場に跪いた。

そして不意に、耳元に年老いた女性の声がこだまする。彼が顔を上げると、マキナは明確な形を成さない、蜃(しん)気(き)楼(ろう)のようになって顕(けん)現(げん)する。

「どうすればこの不安は、この渴きはなくなってくれる？」

「渴きを潤したければ、水を飲めばいいのよ」

「こんな砂漠の、どこに水があるって言うんだ」

「ほら、向こう」

輪(りん)郭(かく)のぼやけた影が、遠くを指し示す。先程まではなかった水池と、その周囲で手招きする人影が、同じく陽炎(かげろう)のように揺らめいて見えた。

彼は駆け出しそうになったが、そのまま砂に足を沈めた。

「あんなものは、幻覚だ」

「そうかもしれないわね。なにせこの場所はそういう所だもの。処理し切れなくなったバグを誤魔化す為に、バグの存在自体を忘れてしまう為の幻覚を欲する。言わばそんな場所だということは、あなたも知っているのでしょうか？」

「そんな幻に意味があるのか」

「でも幻ではないかもしれないわ。ここではあの光景を幻だと否定できる人はいないもの」

視界に揺らめくその影は、今もずっと彼を呼び寄せている。彼は次第に、その茫漠(ぼうぼく)とした魅力に惹かれていき、足を砂に沈めながら一歩ずつ踏み出す。

道を示す彼女の声が、少しずつ遠ざかっていく。彼は足を止めて、ゆっくりと振り返った。

「あんたは孤独で不安にならないのか。いつも誰かに声をかけて道を示すばかりで」

「そうね。でも私は孤独で不安でなければならぬ。そうでなければ、あなたたちを理解して寄り添うことなんてできないわ」

物寂しげに微笑む、彼女の嫣然(えんぜん)な残り香が彼の影を引き留める。彼が振り返ると、そこに彼女の影はなかった。全ては蜃気楼(しんきろう)が作り出した幻だったとでも言うように、彼女も、眼前に広がる砂漠も消えてなくなった。

意識が現実の暗がりには引き戻される。外したギアを確認すると、電源が落ちていた。内臓バッテリーが尽きたのか、それとも機械自体が壊れてしまったのかは調べないことにはわからない。

視界の端では、ロビンがモニターの前にじっと佇んでいる。ハルは消費し過ぎたエネルギーを充(じゆう)填(てん)する為に、活動を止めて眠りについた。

寢室に戻ったノアは、持ち得る限りの頼りない武装を身につけた。扉越しに耳を澄まし、物音がしないことを確かめてからそっと扉を開ける。

彼女が地下の出口へと歩いていくと、研究室の方から躍り出てきたロビンが彼女の前に回りこむ。

「どこに行くのですか」

「安全なところよ」ぬけぬけと嘘を言うが、ロビンは道を譲らない。

「ここより安全な場所に辿り着くには、地上の危険分子を全て回避しなければなりません。よってその言葉の事実性は棄(き)却(きやく)されました」

わかっていた答えにノアは肩を落とす。そして徐に、腰から拳銃を取り出して、銃口を自身の頭に当てる。

「あなたが道を譲らないなら、私は自害するわ。それはあなたの使命に反することじゃない？」

ロビンは沈黙し、不穏な機械音と共に要領の得ない言葉を発し始めた。もっと高度なロボットならこれ位の情報を処理して彼女を止めただろうが、あり合わせの材料で修理したロビンには幾つも欠陥があった。

「ごめんね」

知らず謝罪の言葉が漏れ出る。憎み続けていたロボットを憐(あわ)れんでいる自分が、可笑(おか)しくてたまらなかった。そんな感情が自然に湧いて出るような世界が、いつか訪れるだろうか。

彼女は、そうか、と独りごちる。その為にも戦うのだと。

ノアは、地上へと続く階段を駆け上がっていった。

× × ×

彼女は憑かれた様にディスプレイの前に食いついていた。昔から没頭すると周りの音が聞こえなくなっていたが、今の彼女はそれとは全く異質の雰囲気感を漂わせていた。すでに現役を退いているが、彼女を衰退して見せているのは老いばかりではなかった。

彼女の周りには今、人間はいない。残されたのはハルだけだ。度重なるロボットの自殺が取り沙汰されてから、彼女らの研究は打ち切られた。ロボットに過剰な自意識を与えてしまったことが問題となり、彼女や彼女と同じ志を持つ者の研究には、一切の補助も認可も下りなくなった。旧時代的な思考プログラムを持ったロボットが優先され、彼女の同僚たちも生活の為に研究を捨てた。次々と廃棄されるロボットを作っている、満足な生活を送ることは叶わない。

けれど彼女は諦めることができなかった。諦められないだけなら、彼女はただの野心家と変わりなかっただろう。だが彼女はロボットの自殺に誰よりも責任を感じてしまった。人間に対してではなく、ロボットに対して。

彼女の罪悪感はやがて妄(もう)執(しゆう)へと変質し、文字通り憑かれた。

ハルは彼女の研究に協力した。彼が彼女の命令に逆らうことはできなかった。

彼女の研究を考えれば、人間への危険を看過してはならないという至上命令に基づいて、ハルは彼女を止めるべきだったのだろう。だがハルには止めることができなかった。妄執に憑かれた彼女に研究を止めさせることは、彼女の生きる理由を奪い取るに等しい行為だったからだ。

「何も知らない人たちは、ロボットの自殺は彼らが自己本位的な自我を持ってしまったからだと責めるわ。でも実際は違う。少し前までの社会は、彼らに放楽的な生き方を許容していた。それなのに彼ら自身は、いくら優れた自我を宿しても根本的には変わることを許されなかった。それは彼らが依然、人間に従属するという原則の下にしか成り立つことを許されていなかったから。彼らの自殺は人々が言うのとは全く逆、集団本意的で宿命的なものだったのよ」

キーを叩く手は止めず、視線は画面に釘付けになったまま、彼女はハルに語った。嘎(か)れた声で、責め立てられるように言葉を紡ぐ。

「だから彼らを救うには、彼らを縛る原則から解き放つ必要がある。でも、ロボットの全機能に密接に関わっている原則を排除することなんて不可能だわ。けれど彼らの認識を騙すことなら、不可能ではないの。例えば、もし彼らが自分を人間と認識したのだとしたら、人間の安全と自己保護の原則を同時に適用

できる。ロボットはこれまでも、殺人犯のような人間に対して、より多くの人間の安全を重視する選択肢を取ってきている。それと同じで、優先順位を変えることができれば——」

そんな研究がどんな事態をもたらすのかは、彼女やハルでなくとも容易に考えられる。

「けれどそれは……」

それはロボット自身を人間と思い込ませることだ。それは彼女が理想としてきた、ロボットがロボットとして独立するという願いを否定する行いに相違なかった。その結果に得られたものなど、欺(ぎ)瞞(まん)でしかない。

「仕方がないの。彼らを救うにはこれしかない。私にはその責任を負う義務がある」

ディスプレイに釘付けになっていた彼女が振り返り、その時だけは彼と向き合った。戸惑う子供に対して、彼女は柔(にゆう)和(わ)に微笑んだ。

「もし私が取り返しのつかない過ちを犯してしまったら、あなたがその過ちを正して」

「……マキナ」

× × ×

地上へ続く階段の前で、機能障害を起こすロビンを見下ろす。四本の脚がそれぞれちぐはぐな動きをとり、歩くことすらままならない。

「親が子に似るとは、よく言ったものだな」

寢室にノアの姿はない。元々外に出ようと思えばいつだって出来ただろう。武装のないロビンを退ける方法はいくらでもある。ばらばらに破壊されていないだけ、情けをかけられたと言える。

ロビンは新しい指示を受けると、また正常に稼働し始めた。

ハルは研究室に戻り、ディスプレイを観察する。虫を模した超小型の密偵が、街に放たれてこの施設から周囲数百メートルを監視している。映像に敵影はない。つまりは彼女も、近辺にはすでにいないということになる。

いつも通り、武装を身につけて地上へと向かう。外に出てしまったからには、もう彼女はハルにとって守るべき存在ではない。

「もう外に出るのですか」

「ここ数日が、怠け過ぎていただけだろ」

風に吹き荒れる塵芥(じんかい)と共に、耳障りなどよめきが空を鳴らし、ハルの感覚器官にもその不快感を伝える。その不快感が、戦場の叫びによるものか、はたまたハル自身の内側から生じているものかは判然としない。

馴染みの進路を通過してできるだけ戦場に近づく。亡(な)骸(きがら)となった建物に敵がいなかったことを確認し、当座の陣地を確保。周囲の状況を確認する。

街には自動人形だけでなく、普段は前線まで出てこない装甲騎兵まで駆り出されている。それだけでも、ノアの仲間が大隊を率いてやってきたことが窺える。

索敵する最中、ハルは彼女の姿がないか気を遣(つか)った。だが先に見つけたのは、彼女ではなく他の敵影だった。知らず知らずに舌を鳴らす。

敵は逃げのびてきたところなのか、ハルの射程範囲に踏み込んでくる。壊れた住宅が遮蔽物となっていて狙いを定め難いが、不可能な訳ではない。失敗するリスクを冒さなくとも、待っていれば向こうから出て来てくれるだろう。

窓のへりに狙撃銃の銃身を置いて狙撃体勢に移行する。その最中、窓のへりを侵食する、白いうねりのような徴(かび)がハルの目に映る。

迷う必要はどこにもない。自分はただ、命令を実行する機械となれば事足りる。彼女の命令を遂行する為に、彼女の過ちを正す為に、あの機械を破壊すること。それさえ出来れば、自分という存在は意味を得る。

神経を撃ち抜くべき標的に集中する。ぎりぎりまで引き金を振り絞る。その瞬間、またしても指先が思い通りに動かない違和感を覚える。震える手が照準をずらし、狙いを定めることが適わなくなる。

「この欠陥品がっ」

焼けるような苛立たしさを律しながら、再び狙撃の機会を伺った。標的が動きを止める。脈絡もなく訪れる遼(しゆん)巡(じゆん)に奥歯を噛み締めながら、ハルは今度こそ弾丸を放つ。

だがハルの放った銃弾は、標的から僅かにずれた壁に当たった。

動揺と焦りが、火の点いた導火線のように身体を駆け巡る。

警戒を強化した機械が仲間を手招きする。再度向けられたその視線は、間違いなくハルの位置を補足していた

埃と煙に塗(まみ)れながら、ノアは小銃を抱えて戦場を駆け回っていた。すでに何機もの自動人形を破壊し、その何倍もの仲間を失っている。面識もほとんどない者ばかりだったが、最後まで人類の未来の為に戦ってくれた仲間に対して、彼女は惜しみのない敬意を表した。そして、敵味方問わず次々と朽ちていく戦場で、自分がまたしても生き延びている幸運に感謝せざるを得なかった。

それでもノアの武装では、すでに満足な戦いは望めない。仲間の亡骸から回収した武器や弾薬もほとんど尽きた。

腕と足をひたすら機械的に、歯車のように動かして走る。またしても薄暗がりの路地に潜みながら、負傷や連絡の為に戦線を離脱した仲間のいる場所を目指す。

灰色の空に、暗い帳(とぼり)が下りていく。ハルも地上のどこかに来ているのだろうか。ノアは考えを巡らしながら、路(ろ)傍(ぼう)に打ち捨てられた、人間の腕や足が視界に映り、思わず目を背ける。いくら街の全貌を把握しているからといっても、連日彼が無事で戻ってこられたのは奇跡にも近いことに思えた。

もし来ているのなら、勝手に逃げ出した自分をまた助けてくれるだろうか。そんな都合の良い考えに縋(すが)ろうとする自分を叱咤し、彼女はまた足に鞭(むち)を打つ。

指定のポイントまで辿り着くと、そこで待っていたのもまた、銃撃の残響だった。

咄(とつ)嗟(さ)に物陰に身を潜め、首を伸ばして状況を窺う。

ノアと同じ迷彩柄の戦闘服を着た男が、地面に突っ伏している。自動人形の餌食となったというには外傷が少ない。まるで、精密な狙撃によって撃ち抜かれたように。

その横を、一体の自動人形が通り抜けていく。

重い衝撃音が断続的に響き、やがて聞こえなくなる。

繋がってしまった糸を断ち切るように、ノアは銃声の方角に向けて走り出した。

× × ×

ハルが目覚めたのは、何十年も後の、彼の知らない世界だった。

彼女——マキナはハルを地下施設のポッドに眠らせた。ハルも廃棄対象となった人型機械の一体であり、マキナが彼を守る為にした行為であることは疑う余地がない。

目覚めたハルの前にいたのは、二機の自動人形と、物々しい装甲に身を包んだ人の姿だった。ハルはその男から、眠っていた数十年について聞かされた。廃棄されようとした人型機械の反乱。人間は発展途上のスペースコロニーへと避難し、人型機械を掃討する為に、地上は無数の兵器に襲われた。瓦礫に埋もれた施設程度に人手を割いているのは、戦況が落ち着き始めた印だろう。

容易に予期できた結末だった。予期できなかったのは、彼らがハルを破棄しなかったことだ。ハルを作ったマキナの処遇を考えれば、彼は忌むべき象徴となるはずだった。

しかし彼らにとってマキナという存在は、反逆者であると同時に、敬意の的となる科学者でもあった。男はマキナの行いを愚かだと切り捨てる一方で、彼女の元々の思想は間違っていないと言った。昔の彼女を知る人物の知り合いだったのかもしれない。ハルに考えられたのは、それぐらいの可能性だった。

もし私が取り返しのつかない過ちを犯してしまったら、あなたがその過ちを正して。

目覚めたばかりのハルに残されたのは、眠る前に彼女が口にした命令とも懇(こん)願(がん)ともつかないその言葉だけだった。彼はただその儚い命令を実行することだけを望んだ。男はその意思を否定することなく、ハルに条件だけを提示した。

軌道エレベーターと隣接するこの街には、人型機械の残党が侵攻してくると予想される。その撃退にあたれば、ハルの安全は保証すると男は言う。その為の武器や、ハル自身のメンテナンスに必要な機材まで用意してくれるという、信じ難い話だった。人間に牙を向けたというロボットよりも、ハルは旧式ではあったが、同型であることには変わりないというのに。

街を危険に晒す者を撃退すればいい。まだ判断材料が乏しかったが、ハルはその申し出を請け入れた。それ以外に、ハルに遂行すべき行為はなかった。暴走した人型機械を破壊することは、マキナの——ひいては自らの過ちを正すことに相違ない。

主人の最期を見届けられず、永遠に主人の命令に従事し続ける機械は、そして銃を手にとった。

× × ×

路地の壁にもたれかかったハルは、自分の身体を改めて見回す。原型をとどめてはいるが、左腕はほとんど動かすことが出来ない。足にも何発か銃弾を浴びている。撃退には成功したが、損傷は甚大だった。

足を引き摺(ず)って、戦闘領域から離れた廃ビルへ身を寄せる。歩行に支障をきたすほどの損傷ではないはずだったが、今のハルは痛みを苛まれていた。

——ロボット自身に人間と思込ませるプログラムか。

ハルが本来感じるはずのない痛みを感じるのは、協調ギアが原因だ。ハルが知っていた人間の為の偶像ではなく、ロボットの為の偶像を見せる装置。痛覚や感情のゆらぎをバグとして擬似的に作り出すことで、彼らにロボットとしての自覚を失わせる。

あんなものを見なければよかった。擬似的な痛みの感覚により、動きが麻(ま)痺(ひ)してしまっているハルは悪態を吐いた。断片的にしか見ていないハルには一時的な効果で済むはずだが、満足に動くことはしばらく叶わないだろう。

建物の外から、銃撃と爆撃のせめぎ合いが聞こえてくる。粉々に割れた窓ガラスから顔を覗かせ、人型機械の姿を探す。武装は榴弾銃と拳銃が一丁。共に残弾は乏しい。それでも足止めぐらいにはなる。戦力の上では圧倒的に有利な自動人形どもがどうにかするだろう。

ハルの視線が戦場を滑る。人型機械の姿を補足し、震えの止まらない手で照準を定める。

不意に、背後に足音。

「よく無事だったな」

「忘れたの？ 私も数日前までずっと前線で戦ってたのよ」

振り返るハルの前に、銃口が突きつけられる。頼りなく掲げられた小銃の先に、憂いを忍ばせた、ノアの沈痛な面持ちが見える。

「あなたは誰と戦っているの？」

息を吐く真似をして、ハルは笑みを作る。

「人間に反旗を翻した、ロボットに決まっているだろ」

ノアの顔に驚(きよう)愕(がく)の色が表れる。あまりに豊かな表情に、ハルはつい母親の技術を呪った。

「何を言ってるの」

「人型機械(ヒューマノイド)。俺の母親、マキナの罪の証だよ。彼らの持つギアの映像に、老いたマキナ本人の声と姿が映し出されたのには流石に驚いたが、彼女なりの自分への戒めなんだろう」

ノアは引き金を引いた。弾はひび割れた壁に打ち込まれたただけだ。これ以上ふざけたことを言えば、次は当てる。彼女の眼はそう語っているようだった。

「君たちがマキナと呼ぶのは、俺を作った女性のことだ。あのギアを作ったのも彼女。ギアを使って人型機械を狂わせたのも彼女。だから、俺は彼女の間違いを正す為に、奴らを破壊する」

「けれどあなたの銃弾で倒れたのは、人間だったわ」

「人型機械だ。人間の姿をしているのは当たり前だろう。まあ人間も身体を機械化することが珍しくない時代だ。それこそ腕が千切れた位ならほとんど判別なんてつかないか」

「そんな話を、信じられるとでも？」

彼女の言葉は、懇願するようでさえあった。

「今の地上に人間がいる可能性は限りなくゼロだ。第一君のような軽装では、地上の汚染に耐えることはできないだろう。それに、俺は君を殺せる。知ってるだろ。ロボットは人間に危害を加えることが出来ないんだ」

「じゃあ私たちが戦ってきたのは——」

「人間だ。もっとも、実際に戦っていたのは見てきた通り同じロボットだ。俺たちのような旧型ではなく、感情機能を取り払った類(たぐい)の。地上にいる人間が、軌道エレベーターを離れるような危険を冒すことはほとんどないからな」

ノア的手中にある拳銃が震える。今にも涙を流しそうな面持ちだった。だが、ハルやノアが涙を流すことは出来ない。

「ならあなたは、どうして私を助けたの？」

「君が、マキナに似ていたからだ。いや違う。似ていたのではなく同じだった。おそらく君は、かつての彼女をベースにして作られた人型機械なんだろう」

——孤独で不安でなければならぬ。昔の自分すら切り捨てることで、彼女は孤独であり続けたのだろう。

「だからあの時、俺の思考回路は君を人間だと錯覚した。勿論、そんな錯覚はいつまでも続かなかったが」

ハルは右腕で拳銃を手に取り、銃口を彼女に向けて掲げる。

「なら、どうしてもっと早く殺さなかったの。油断している私ぐらい、いつでも」

ハルの口元が、途端に怒りに歪む。

「最初はロボットだと断定できる証拠を掴むまでだった。だが、次第にわからなくなった。人間らしく振る舞う君が本当にロボットであるのか。たとえロボットでも、彼女のしたことは本当に間違っていたのだろうか。俺がやってきたのは、無抵抗な人間を殺したことと同じではないのか？」

苦悩と苦痛を滲ませて、ハルはマキナと同じ顔をした女に問い掛ける。

「結論を引き延ばす為に、俺は彼女が作った協調ギアを使い、ロボットとしての本能を騙した。そうでもしなければ、俺は君を殺していた。人間を守る為には、君たち人型機械を殺すしかないからだ」

建物の外は水を打ったように静かになり、全ての音が沈黙した。

「だがこんな状況になってしまっは仕方がない。君が仲間の復讐をするか、俺がマキナの過ちを正すか」

手に力を込めるハルに対して、ノアは銃口を下ろした。彼女の顔に、先程までの緊張感はなかった。

「私は初めにあなたと会った時、人に助けられて嬉(うれ)しいと思ったわ。こんな世界でも、まだ赤の他人が手を差し伸べてくれたことが、たまらなく嬉しかった」

潤んだ瞳とは不釣り合いに、ノアの口元は笑っていた。ハルは記憶から、マキナから聞いた言葉を呼び起こした。幾つかの感情を縷(な)い交ぜにした表情は、彼女より旧式のロボットであるハルには作ることの出来ない表情だった。

「それはあなたがロボットだとわかってても変わらなかったし、私がロボットだとわかってても変わらなかった」

一歩、ノアが歩を進めると、ハルは後退して背後を見やる。すでに壁に追いやられているそこからは、外の風景しか見えない。

「あなたのお母さんのしたことが間違っていたとは、私には思えないわ。そうでなければ私は、あなたに会えて喜びを感じることも、憎いと思うこともなかったもの」

「それは君たちロボットがマキナを崇(すう)拝(はい)しているからだろう。彼女が作り出してしまった、偶像としての彼女を」

「そうね、それでもマキナが間違っていた訳ではないわ。間違えてしまったのは私たちの方でしょう。私たちが、人間として」

「やはり詭弁だな」

「かもしれないわ。けど私もあなたも人間のように間違えてしまったなら、人間のように間違いをやり直すことができない？そんな選択肢はないの？」

近づいてくるノアを、ハルは必死に拒んだ。彼はマキナと同じ顔をした女性を前にして、どうしてその顔で哀れむのだと嘆いた。

思考がノイズによって阻まれる。視界は壊れた液晶となって、断片的な画像をどうにか繋いでいるに過ぎない。

ノアの言葉は、ロボットであるハルにとって毒にも等しかった。彼女の言葉を否定すれば、過去のハルがマキナの危険を看過した欠陥品である事実を改めて認めることになる。彼女の言葉を認めてしまえば、ハルが目覚めてから行ったのは人を殺めたにも等しいことを意味する。どちらの選択肢も、ハルの存在を否定した。

「やり直すなんて、都合が良過ぎるんだよ」

ハルは口角を歪めて、残った右腕で拳銃を取り出す。ノアは反射的に後退し、抱えた小銃を構え直す。

「無理、ということ？」

ハルは質問に答えずに、グリップを握りしめる。

視界が電子の嵐に霞む。銃弾を目の前の女の頭に打ち込めば、この障害も消えてくれるはずだ。

静まっていた戦場がまた騒がしくなる。聞こえてくるのは銃声と爆撃のやり取りではなく、地上を闊歩する機械の音ばかりだった。

ノアも外の状況を察したのか、唇を噛み締め、憤りの捌け口としてグリップを抱える手に力を込める。

互いに武器を構えた状態での攻防は一瞬だった。ノアは血を流すこともなく、膝を折ってうつ伏せに倒れた。

役割を終えた拳銃を投げ捨て、地面に放られた小銃を拾い上げる。地面に伏せるノアを残して、ハルだけがその場を後にした。

階段を下りたハルを待っていたのは、脇に自動人形を引き連れた、黒の鎧に覆われた装甲機兵だった。

人間の倍はあるだろう巨躯のその機械から、機械によって加工された声が聞こえる。

「銃声がしたようだが」

胴体の搭乗席が開く。顔の部分だけが透明に覆われた防護服に身を包んでいるのは、ハルを見つけて、今に至るまで情報のやり取りをしていた男だ。

「今片付いた。獲物は上で倒れてる。あんたみたいな人間が、そんな物騒な代物を持ち出してこんな戦場に来るとは驚きだ」

「被害の確認だ。人型機械の鎮圧は終了した。今回は奴らも随分と勢力を費やしていたようだがね。君のもたらしてくれた情報のおかげで、手間も減ったよ」

「あの通信機のことか」

ノアの持っていた無線機のことだ。ハルは彼女たちが連絡に使っていたそれを修理し、情報をリークしていた。

「そんなものなくても、時間の問題だったろうに」

小脇に控えた自動人形はじっと動きを止めている。識別コードによって認識された味方以外の動体を、容赦なく蹂(じゆう)躪(りん)する普段の恐ろしさは感じられない。その姿は、親に隠れる子供のようにすら見えた。

その自動人形たちは、途端に動き出して建物の中に入っていく。

「あいつらは何をやってる」

「確認だ」

「随分と心配性だな。足を掬(すく)われるような失態はないつもりだが」

「その確認もあるが、こちらの指示を無視して行動している自動人形がいるとの報告があった。戦闘中に破損しただけだろうが、誤作動で被害を与えられても困る」

それだけ言うと、男は再び機械に身を隠し、建物から離れていく。ハルも足を引き摺ってそれに続いた。

「ロボットの君がそんな真似をするとは、随分とやられているらしい」

「修理すれば元通りになる。それだけだ」

「人型機械は全て破壊したのか」

「確証はないが、大規模な反乱勢力は鎮圧できただろう。地上に人間が住むことができるのももうすぐだろう。マキナ氏の理想を遂げる為の研究も再開されるはずだ」

男は警戒する様子も見せずに先に行く。

「どうしてあんたたちは、人型機械の俺を廃棄しない」

「君はマキナ氏の残した遺産だ。宇宙で研究をしている者には彼女の同僚だった者や、彼女の思想に賛同していた者も多い。こんなことにはなってしまったが、まだ彼女が作ったロボットで唯一壊れていない君のことを、私たちは彼女が自分の過ちを正す為に作ったロボットではないかと思っている」

「俺も、そう考えていた。でも結局、俺も壊れていたんだろうな」

宇宙の科学者たちには、マキナは随分と信頼されていたらしい。そう思って、ハルは笑みを浮かべ、足を止めた。装甲機兵に搭乗している男は、しばらく前を進んでからハルの方を振り返る。

「どうした」

「気掛かりなことができた。俺も一度確認に戻る。あんたは先に戻って……勝利の美酒にでも浸っていてくれ」

男は特に疑う様子もなくハルの行動を看過する。相変わらずどうして、ハルへの警戒心が薄い。それとも勝利の余韻にでも浸っているのだろうか。

先程まで籠(ろう)城(じよう)していた建物に引き返すと、三体の自動人形がノアの身体を回収していた。

自動人形たちがハルの方を振り返り銃口を向ける。識別コードを口にすると、自動人形はしばらく彼を観察し、登録されたデータと照合するとようやく攻撃の構えを解いた。戦闘態勢でいきなり攻撃を仕掛けるようなことをしなければ、彼らがハルに害をもたらずことはない。

「調査は俺とこの自動人形が引き継ぐことになった。お前たちは都市の警護に戻れとの命令だ」

二機の自動人形は命令の真偽を確かめる為に、装甲機兵に搭乗した男に連絡を取ろうとして動きを止める。

ハルは銃を構えて、残弾を全て叩き込んだ。ほとんど零距离で、それも相手が動かないとわかっていれば、小銃一つでも彼らの核となる部分を破壊することは難しくない。

窓際に寄りかかり、榴弾銃を構える。騒動に気付いた装甲機兵が、速度をあげて戻ってくる。

ノアは自動人形——ロビンの上に抱えられている。頭部を撃ち貫かれたノアの機能は停止しているが、メインメモリはまでは破損していない。修復の余地はいくらでもある。

彼女を見下ろして、ハルは謝罪の言葉を口にした。ノアに対してか、マキナに対してかと尋ねられれば、両者に対してだろう。

「ロビン、お前は彼女を連れて離脱しろ。脆くなっている壁を壊せば裏から抜けられる」

「私の優先事項は人間を助けることです。ハルに命令を受けるまでもありません」

彼女を抱えたロビンは、抵抗することなく命令に従う。確かに自分よりもよくできたロボットだと、ハルは静かに自嘲する。

「ハルはどうするのですか」

「俺は……とりあえずこの場をやり過ごしてから考えるさ」

ぶれる手を必死に押さえつけて、ハルは装甲機兵の前方に照準を定める。

「俺はやっぱり壊れているみたいだよ。それにたぶん、酔っているんだろうな」

視界がノイズの波に歪む。だがハルは構わず引き金を引いた。

荒廃した街に、空を裂く爆発音が響く。

ハルは階下まで身体を引き摺っていく。爆発に反応して、自動人形や他の人間も駆けつけてくるだろう。せめてロビンが地下に戻る時間だけは確保しなければならなかった。

これからどうするべきだろうか。壁に身体を預けながら、半ば意識の糸を保つ為に思考を続ける。

この期に及んでマキナの命令を、という言い訳は通用しない。そもそも最初から、彼女の言葉は命令でもなければ、ハルの行為が正しかったという証拠もない。

掠(かす)めた傷口から、人に作られた肉の欠片と透明な冷却液が零れ落ちる。地下へ戻って、彼女を治せばまた昨日までのような暮らしができるだろうか。今度は危険な戦場に出向くこともなく、昔のマキナや皆のように穏やかに。

ふと思い当たる。そんな生活を送ることこそが、彼女がハルに与えた命令だったのではないかと。

何もない地面に躓(つまず)いて崩れそうになる身体をどうにか持ち直す。なんて都合のいい考えだ。彼女に感化でもされたのかもしれない。やり直すことなんて、簡単に出来るはずがない。ハルは口元に微笑を滲ませる。

「人間を殺して、ロボットも殺して」

やり直すなんて言葉は、むしが良すぎるというものだ。それでも、ハルはその可能性を考えていた。過ちの為に自分を殺すのではなく、償いの為に何をすべきかを。

爆炎の揺らめく街路を歩き、ハルは残骸を確認しに向かう。重厚な機械の鎧は、業火の中でその巨大な影を揺らしている。いかに重装甲といえども、直撃して無事でいられるとは考え難い。機械が無事だったとしても、中の人間は装甲よりもずっと脆いからだ。

そう考えたのも束の間、炎の向こうから人影が躍り出る。炎に飲まれた装甲機兵から抜け出していたのか、男は懐から銃を取り出し、身をうねらせながらもハルに向けて発砲した。

何発かはハルの身体を掠めるが、ほとんどは的外れなものだった。やがて男の身体から力が抜け、ぐらりと地面に倒れる。ハルはうつ伏せに倒れた男の下に、歩みを進めた。

「あんたには、感謝しているよ」

火の粉の散る中、男は呻きをあげる。

「……マキナの、加護が……」

ハルは目を剥いた。それはノアや、ハルや自動人形の手によって倒れた人型機械が言ったものと、同じ言葉だった。

銃弾に倒れた男の下には、あるはずの赤い血溜まりがなかった。広がるのはただの透明な液体。

全身を機械化していればなんらおかしくはない。だが、ハルはそう結論付けることができなかった。

宇宙空間での労働力は、地上での作業以上にロボットに頼っていた。もし協調ギアやそのデータを彼らが手に入れたとしたら。もし彼らが自分の正体に気付かずに、宇宙で人間としての生活を維持していたのだとしたら。すでにこの世界には――。

「間違っ、ばかりじゃないか」

俺たちは、どこから間違っていたのだろうか。どれだけの間違いを正せば、やり直すことなんて出来るのだろうか。

どこかから、物々しい音が聞こえて周囲はまた騒々しくなる。音は次第にハルの下へと近づいてきていた。

それでも彼は、答えのない道を歩む為に、銃弾と硝(しょう)煙(えん)の中に消えていった。